

〈論文〉

## 鳥居龍藏のミャオ族調査の特徴 ——台湾の少数民族調査との比較を通して——

田畑 久夫

The Unique Characteristics of Torii Ryūzō's Survey of the Miao People:  
Through a Comparative Study with the Ethnic Minorities of Taiwan

Hisao TABATA

One of Torii Ryūzō's academic interests was the origin of the Japanese people. Due to the suspicion that a portion of Taiwan's indigenous groups were a part of the same ethnic group as the Miao people, who reside in southwest China, there was an inclination towards a theory that the Japanese ethnic group also originated from the south. However, as a result of the survey of the Miao people, he was unable to confirm that any of the indigenous groups in Taiwan were indeed a part of the Miao ethnic group. Following these findings, Torii took the stance that the Japanese originated from the north. The survey of the Miao people became an important turning point regarding research into the origins of the Japanese. In this paper, we discuss the unique characteristics of the Miao people through a comparison with indigenous groups in Taiwan.

### 1. 問題の所在

鳥居龍藏(1870-1953年)は、「最初に科学的な研究手法を駆使して海外でのフィールドサーヴェイに従事した先駆者である」(田畑2015:11)と指摘した如く、わが国において、科学的な海外調査をはじめて実施した研究者であると位置づけることができる。この点こそが、近藤重藏(1771-1829年)、間宮林藏(1775-1844年)、松浦武四郎(1818-1888年)などによる、いわば当時外国\*1なみの扱いをしていた蝦夷(北海道)や樺太(サハリン)における鳥居龍藏のフィールドサーヴェイ\*2(field survey)とは異なっているのである。それ故、上述した近藤重藏など3名は、研究者で

はなく、探検家(explorer)としての要素つまり側面が強かったと推察できる。鳥居龍藏に関しても、研究者という側面のみではなく、探検家としての側面も多く残っていた。とくに、本稿の主要な研究対象である西南中国に居住する鳥居龍藏のミャオ族調査は、海外において、初期に属する代表的な実態調査であることなどから、探検家としての側面が認められる\*3。

鳥居龍藏のミャオ族調査は、以上に論じたような側面、つまり研究上の性格を有している。本稿は、かかるミャオ族調査の特色を解明することを目的としている。鳥居龍藏の非常に長い期間に及ぶ海外での実態調査\*4において、ミャオ族調査

第1表 西南中国調査を中心とした国内外のフィールドサーヴェイ

年度	調査地	備考
明治25年(1892)	千葉県網島	東京帝国大学理科大学人類学教室整理係 阿部正功, 大野延太郎と共同
明治26年(1893)		
明治27年(1894)	茨城県土浦	東京人類学会より派遣
明治28年(1895)	遼東半島・満州(第1回)	
明治29年(1896)	台湾(第1回) 沖縄県	東京帝国大学より派遣
明治30年(1897)	徳島県木頭 台湾(第2回)	東京帝国大学より派遣
明治31年(1898)	台湾(第3回)	東京帝国大学より派遣, 東京帝国大学理科大学助手
明治32年(1899)	千島列島占守島	東京帝国大学より派遣
明治33年(1900)	台湾(第4回)	東京帝国大学より派遣
明治34年(1901)	岐阜県白川郷・石川県 能登半島	徳川頼倫と共同
明治35年(1902) ~明治36年(1903)	西南中国	東京帝国大学理科大学より派遣
明治37年(1904)	近畿	
明治38年(1905)	満州(第2回)	東京帝国大学理科大学より派遣, 東京帝国大学理科大学講師 蒙古喀喇沁王府教員顧問兼男子学堂教習
明治39年(1906)	蒙古(第1回)	

〔出所〕鳥居龍藏(1977)『鳥居龍藏全集 別巻』, 朝日新聞社, 181-192 などより作成。

は、既論文(田畑2015: 23-25)の結論で述べた研究手法上の特徴と重複する部分も存在するが、以下に論を展開するように、重要な研究上の位置を占めていると考えられるからである。

その第1は、西南中国のミャオ族調査を境にして、鳥居龍藏は海外における研究対象地域を変更すなわち転換したことである。というのは、ミャオ族調査の成果を纏めた論攷(鳥居1903, 1905など)や調査報告書(鳥居1907)の発表・刊行以降、研究対象地域がシベリア、満州をはじめとする北方地域に転向し、この地方に関する論攷(鳥居1911, 1915など)や報告書(鳥居1922など)、著作(鳥居1924, 1928など)を矢継ぎ早に発行・刊行した。この点に関しては、大林太良も同様に、かかるミャオ族調査が研究史上の大転回点となったと指摘している\*5(大林1975: 121-132, 1980: 301-304)。

その第2は、ミャオ族調査により、ミャオ族をはじめとする西南中国に分布・居住する少数民族

が、日本文化および日本民族の起源について、多大の影響を与えたと鳥居龍藏は推察した。すなわち、その後鳥居龍藏が展開することになる日本文化および日本民族起源論の端緒となった点が挙げられる\*6。

なお、鳥居龍藏は、中華人民共和国に分布・居住する非漢族(Non-Chinese)の民族集団を、少数民族という用語で表現していない。民族集団を呼ぶ場合、一般に用いられている、個々の民族名の最後に「族」という術語を付けて呼ぶという呼称法を取っている。このように、鳥居龍藏が海外で実態調査した民族集団の呼称に関しては、すべてこの呼び方を採用している。唯一の例外は台湾に住む先住民族についてである。これらの先住民族では、黥面(有黥面)蕃の如く、民族名の最後に「蕃」を付けて表現している。そのため、民族名の最後に付けられた「族」か「蕃」によって、その民族集団が中国の大陸部に居住する少数民族か、台湾の先住民族であるかが容易に識別可能と

なる\*7。

以上から、ミャオ族などの西南中国における少数民族調査の成果は、その後、例えば照葉樹林文化論などに多くの第1資料を提供することを通して、有力な示唆を与えることになった\*8。

このように、鳥居龍藏の調査・研究にとってミャオ族調査は、非常に重要な位置を占めるフィールドサーヴェイであった。本稿の目的は、既に述べた如く、このような重要な意味を有するミャオ族調査の特色を論究するものである。その場合、論究に際してはミャオ族調査にとどまらず、ミャオ族調査と直接大いに関連があると考えられる、台湾調査などの先行調査についても、検討・分析の視野に入れることにした。そのために、ミャオ族調査を中心とした、鳥居龍藏の国内外におけるフィールドサーヴェイの記録を時系列的に整理したのが第1表である。第1表を参照すると、台湾調査はミャオ族調査直後に実施された。すなわち鳥居龍藏は、台湾調査以前、最初の海外でのフィールドサーヴェイである渤海湾北部に位置する遼東半島、および隣接する満州調査(1895年)、さらに合計4回に及ぶ台湾調査(1896-1900年)、その上台湾調査を挟んで施行された千島列島最北端占守(シユムシユ)島と、3度海外において行なっている\*9。

台湾調査において、鳥居龍藏の念頭を絶えず去来したのが、既に指摘したように、台湾の先住民族が日本民族の祖先と同系統ではないかという疑問があったからである。かくして、ミャオ族調査は、日本民族の祖先の実態の解明を行なうことも動機の1つとなった。本稿では、この点に関して、千島列島占守島および台湾の両調査の成果なども踏まえながら、ミャオ族調査の特色について検討・分析する。そのことによって、鳥居龍藏のフィールドサーヴェイの基本的性格の端緒がミャオ族調査であることを論証しようとするものである。

## 2. 台湾調査の目的およびその特徴

### 1) 台湾調査に至るまで

鳥居龍藏は、前項で指摘したが、合計4回に及ぶ台湾調査期間中に、千島列島占守島においてもフィールドサーヴェイを実施している。占守島でのフィールドサーヴェイの成果が台湾調査の目的とも関係があると推察できるからである。台湾調査は、自主的な調査ではなく、東京帝国大学からの要請に依るものであった。以下において、その要点のみを整理しておく。

日本は日清講和条約に則り、台湾の植民地経営に着手することになった。当時の産業界では、かかる国家的要望に応じるべしという気運が非常に高揚していた。このような状況に応じて、東京帝国大学においても、次のような決議が採択された。すなわち、動物、植物、地質および人類の4分野の主任教授を現地に派遣し、未だ学術的に未知な部分が多い台湾に関して、学術的な総合調査を行なうことになった。この学術調査について、鳥居龍藏は、人類学教室主任教授坪井正五郎から台湾調査の依頼を受けたのであった\*10。

台湾調査は、以上論じた経緯で実施された。鳥居龍藏は、上述した動物、植物、地質の3分野の教授たちよりも熱心にフィールドサーヴェイに励んだ。合計4回にも及ぶ台湾調査は、担当分野が人類学的調査であることから、台湾に分布・居住する先住民族(少数民族・原住民族)が主要な研究対象となった。台湾には、海岸地帯の平野などの平坦地を中心に、台湾海峡を挟んで対岸に位置する福建省などから渡来した漢族が多数分布・居住している。これらの集団は、1949年に蒋介石政権がこの地に移る以前から住みついていた漢族の子孫である本省人と、蒋介石政権樹立後に移動してきた漢族およびその子孫である外省人に大別できる。しかしながら、鳥居龍藏がフィールドサーヴェイの主対象としたのは、これらの多数派を占める漢族ではなく、少数民族であった。この点は

以下に論じる、互いに関連する2つの理由からであると推察できる。

第1は、恩師坪井正五郎と小金井良精とを中心に展開されたアイヌ＝コロボ（ポ）ツクル論争と称される、日本民族祖先論争との関連に関してである。すなわち鳥居龍藏は、千島列島占守島調査の結果、アイヌ＝コロボ（ポ）ツクル論争に参加せざるを得なくなった。この点については、文中の\*7でも紹介したように、鳥居龍藏は、日本民族の祖先が「固有日本人」であるという学説を提唱した。このように、鳥居龍藏の脳裏には絶えず日本民族のことがあったのである。それ故、台湾において、多数派を占める漢族ではなく、日本民族と類似性が高いと推察される少数民族に注目した。コロボ（ポ）ツクルおよびアイヌは、いずれも北海道に居住する先住民族つまり少数民族であると看做されていたからである。

第2の理由は、その一部を既に拙稿の中において、西南中国に主として居住する少数民族ミャオ族の研究手法上の特色として指摘した点（田畑2015：13）と重複している。それは、ミャオ族を日本民族の祖先の有力な集団と想定したことである。このことは、鳥居龍藏が西南中国の踏査旅行を実施した目的と関連を有しているのである。すなわち、台湾の少数民族の一部（黠面蕃など）と、西南中国に現在居住しているミャオ族の支系（亜集団）が人類学上において、非常に密接な関係があるのではないかということであった。そこで、実際に西南中国に出かけ、この疑問を解こうとした。鳥居龍藏がこのような疑問をもつに到ったのは、前述の第1の理由として挙げた、日本民族の祖先に対する関心からであった。千島列島占守島などのフィールドサーヴェイから、鳥居龍藏は、かかる関心を有するようになったのである。台湾の少数民族調査に従事していると、調査対象である民族集団と日本民族の祖先との類似性が認められるという事実気付いた。そして、さらに

その民族集団の一部が西南中国に住むミャオ族と同一集団ではないかという考えが浮かんだ。つまり、台湾の少数民族の一部集団を媒介として、日本民族の祖先とミャオ族が互いに密接に関連しているのではないかという疑問であった。このような考えに到達したのは、de Lacouperieの主張に影響を受けたことも事実である\*11。その学説とは、主著の中で記載されているように、台湾の少数民族の一部とミャオ族が類似性をもつことから同一の民族集団であると看做す点である。このde Lacouperieの学説を確かめることも、ミャオ族調査の目的の1つであった。

以上論じた2つの理由から、鳥居龍藏は与えられた人類学調査の中心を少数民族に焦って実施したのであった。

## 2) 台湾調査の特色

以上論じた理由から、台湾に分布・居住する少数民族の調査が実施されたのであった。しかしながら、鳥居龍藏の頭の中には、de Lacouperieの影響かと推察されるが、台湾におけるフィールドサーヴェイ、とりわけ人類学的調査は、台湾に居住する少数民族だけの検討・分析のみでは、十分に解明することが困難であるという考え方があった。その解明には、他地域に分布する民族集団との比較を行なってこそ、台湾の少数民族の実態解明が可能であるとの結論に達したのであった。この点に関して、鳥居龍藏は、台湾より南方に分布・居住する民族集団との比較を実施する必要があると主張する。具体的にいえば、フィリピン諸島およびインドネシア民族\*12が直接（第1義的）に関係し、南中国に居住するミャオ族やヤオ（瑶、僑）族などが間接（第2義的）に関係していると推察した\*13。

そこで、上述した如く、日本民族の祖先に強い興味・関心を有した鳥居龍藏は、間接ではあるが、西南中国に住むミャオ族調査を他の南方調査

第2表 台湾の調査地と調査民族

回数	主要調査地	主要調査民族
1	台湾東部	阿眉蕃, 黥面蕃, 卑南蕃, ブスン蕃
2	蘭嶼島 (紅頭嶼)	ヤミ蕃
3	台湾南部	パイワン蕃, ツァリセン蕃, 卑南蕃, 阿眉蕃
4	台湾中部	パイワン蕃, ツァリセン蕃, ブスン蕃, 新高蕃, 阿眉蕃, 黥面蕃, 平埔蕃

〔出所〕鳥居龍藏 (1910) “Etudes Anthropologiques, Les Aborigènes de formosa (1<sup>r</sup> Fascicule.) Introduction.”, 『東京帝国大学理科大学紀要』, 28-6, 鳥居龍藏 (1976b) 『鳥居龍藏全集 第5巻』, 朝日新聞社, 5-8 などより作成.

より優先させたのであった。なお鳥居龍藏は、台湾の少数民族を調査・探検する、あるいはしたいと望んでいる者は、「其の一、二人の人を除く外は一も人類学的智識を有せざるの人士なり」（鳥居 1897, 鳥居 1976d : 409）と論じ、調査には人類学的知識の重要性、かつ必要を厳しく説いている。

以上のような視点から、台湾の少数民族調査が開始された。鳥居龍藏は、台湾に分布・居住する少数民族の実態を把握するために、蘭嶼島や澎湖列島の離島を含む台湾全域において、調査を行なった（第2表）。調査の主体は、少数民族の中でも、生蕃\*14と称される民族集団であった。かかる生蕃のうち、ミャオ族と関係が深いと推定される黥面（タイヤル）蕃など、台湾中央部の山岳地帯に分布・居住する民族集団を検討・分析していく\*15。

鳥居龍藏が西南中国に住むミャオ族と関連を有する民族集団として、具体的に想定したのは、既に述べたように、de Lacouperie の学説の影響などを受けて黥面蕃であった。が、台湾調査をしてみると、次のような事実に気付いた。重要な指摘であるので、多少冗長ではあるが、労を厭わず引用すると、「台湾の蛮族は類似せりという説あり。そは黥面蕃なりしか、小生未だ貴州苗字の中に彼等と類するものを見ず候。これまで外人はいはざれども、小生は反つてかの新高山下のブスン蕃、阿里山上の阿里山蕃（新高蕃の1支系（亜集団）のこと——筆者註）はもっとも注目すべきもの

かと相考え候。即ちブスン蕃の雲南の獼々の風格と類似し居る所なり。又阿里山蕃は貴州苗字の成るものと類似する所有之候」（鳥居 1903, 鳥居 1976c : 579-580）と記している。つまり、対象民族が黥面蕃の他、ブスン蕃、新高蕃（ツォー蕃）の1支系（亜集団）である阿里山蕃\*16などに拡大することになった。さらに、対象地域である西南中国に居住する民族集団に関しても、貴州省を中心に分布・居住するミャオ族だけではなく、隣接する四川省や雲南省に主として分布・居住する猓獠（イ、彝）族も、台湾の少数民族と深い関係が想定される。かくして、関連する民族集団は、ミャオ族が分布・居住する貴州省など西南中国の一角だけではなく、猓獠族などが分布する四川省や雲南省へと対象地域が拡大することになった。それ故、本稿では、これら該当するすべての少数民族を検討・分析しなければ、台湾の少数民族との関係が十分に把握できないといえよう。しかしながら、対象民族や地域を拡大することは、鳥居龍藏の調査がフィールドワークではなく、フィールドサーヴェイが主体であるという性格を有することなどを考慮して、本稿では、当初から興味・関心を強くもっていた、ミャオ族との関係がとくに深いと推定される黥面蕃および阿里山蕃を中心に検討・分析を行なう。

#### 黥面蕃調査

黥面蕃の黥面とは、「魏志倭人伝」（『三国志・魏書巻30・東夷伝倭人の条』）に皆黥面文身と記載されているように、顔面に入墨を施すことをいう。

鳥居龍藏が台湾の少数民族の中でもとりわけ黥面蕃に興味・関心を有したのは、次のような理由からであった。周知の如く、鳥居龍藏が千島列島占守島を調査することになったのは、アイヌ=コロボ(ポ)ツクル論争との関連からであった。その関係でアイヌには入墨がみられることを知ったのであった。そのような意味から、同様に入墨をしている黥面蕃が日本民族の祖先と関連があるのではないかと類推したのであった。

台湾東部を中心に調査した第1回台湾調査において、鳥居龍藏ははじめて黥面蕃と接触した。黥面蕃は有黥(面)蕃<sup>\*17</sup>と記される場合が多くみられることから判明するように、男・女とも顔面を中心に直線状の入墨を施しているという大変識別しやすい特徴を有している。台湾に居住する他の少数民族は、顔面に入墨を施す習俗を有していなかった<sup>\*18</sup>。それ故、台湾調査において、鳥居龍藏は容易に黥面蕃と他の少数民族との識別が行なえたのであった。

このように、身体上目立った特徴をもつ黥面蕃であるが、さらに他の少数民族などの首を狩り取るという首狩り(head-hunting)の習慣も有していた<sup>\*19</sup>。狩り取った首は、集落の入口付近に竹でつくった棚を設置し、その上に1列に並べたり、各戸の縁側の一角に積んだりした<sup>\*20</sup>。首狩りに関して、鳥居龍藏は、無闇矢鱈に行なうのではなく、己の領地を侵したとか、仲間を殺した復讐とか明確な大目的が存在するという<sup>\*21</sup>。かように、鳥居龍藏は首狩りの目的を推定している。しかし、その根底には、首狩りを行なうことで、それぞれの民族集団としてのアイデンティティの強固な団結を確認し、かつ維持するという性格も見逃せないものと思われる。

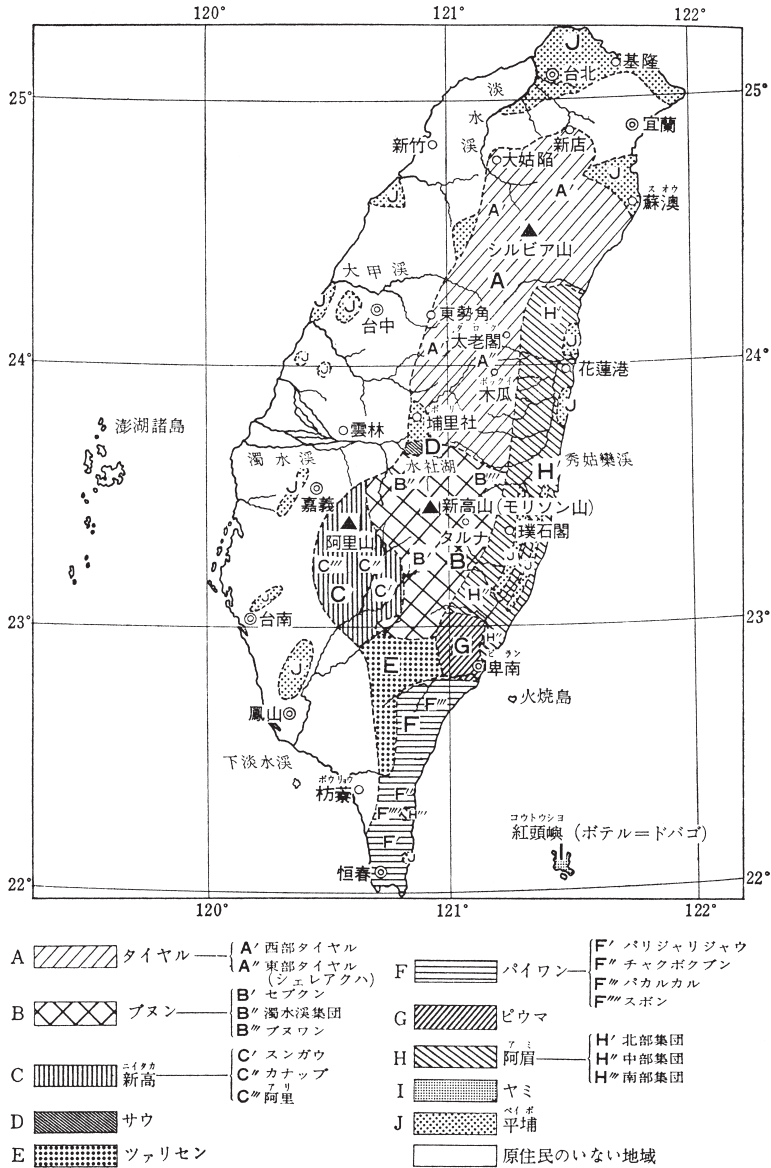
以上論じた目立った特徴を有する黥面蕃は、第1図にみられたように、台湾のほぼ中央に位置する埔里(裏)社とその東にある秀姑巒溪を結ぶ線より北側の山岳地帯を中心に展開している。さら

に、この集団は、西部および東部の2支系(亜集団)に分離して居住しているという点も共通している。

鳥居龍藏によれば、台湾の東部とは、太平洋に面する新城から知本に到る範囲で、その背後は、中央部を縦断して聳える脊梁山脈の山中に到する南北に細長い地域を指す<sup>\*22</sup>(鳥居1897a, 鳥居1976d:465)。それ故、上述の黥面蕃は台湾東部の北方に分布・居住している民族集団である。そのため、北蕃と呼ばれることもあった。この民族集団は、「彼等が好んで人頭を集むるよりheadhunterと呼ばれたり」(鳥居1897a, 鳥居1976d:469)と記されるほど、台湾の蕃族すなわち先住民族の中で、もっとも猛悪な集団として恐れられていた。黥面蕃に関しては、東部北方の南端に位置する木瓜社および隣接する太老閣社の2社に集中して調査を行なっている。これら2社の黥面蕃(それぞれ木瓜蕃、太老閣蕃と称す)の特徴については、社が互いに隣接していることもあり、類似点も多い。しかし相違点も認められる。以下では、これらの主要な特徴に関して、検討・分析を行なう<sup>\*23</sup>。ただし、鳥居龍藏は、「彼らの開化の位置」という研究視点から、すべての特徴ではなく、人類学上必須かつ身体に関係する項目を中心に調査を実施した<sup>\*24</sup>。

#### 身体的特徴

黥面蕃の平均身長については、台湾東部に分布・居住する他の蕃族すなわち先住民族と大差が認められないが、高山蕃よりは高いとされる。その数値を示す記述はみられない。鳥居龍藏が台北滞在中にみかけた黥面蕃の成人男性の身長を1.65メートルとしている。この数値は、台湾東部に住む他の蕃族と大差がないと推定されるが、高山蕃<sup>\*25</sup>より高いという。皮膚の色は黒い褐色である。顔形は男性が長形、女性は全体が扁平であるが、長形ではない。眼は大きく、鼻は高い方である。鼻形については男女差がみられ、男性は鳶



第1図 台湾の先住民族（原住民）分布図

〔出所〕鳥居龍藏 (1910) "Etudes Anthropologiques, Les Aborigènes de formosa (1<sup>re</sup> Fascicule.) Introduction.", 『東京帝国大学理科大学紀要』, 28-6, 鳥居龍藏 (1976b) 『鳥居龍藏全集 第5巻』, 朝日新聞社, 13より引用。

鼻、女性は釣形のものが多く、さらに鼻翼が左右に広がる傾向がみられる。歯に関しては男女とも前歯の門歯を2本抜く習慣がみられる。顔面を中心に入墨を施すことは前述した通りであるが、入れた入墨の本数の違いなどから太老閣蕃の方が木瓜蕃よりも古風の習俗を残しているといわれてい

る。

頭髮に関しては、男性は年齢によって髪形が異なっている。すなわち、少年は多くが散髪しており、青年は後で髪を束ねた結髪（第2図・A）か、あるいは後頭骨のところで頭髮を締めくくり、残った髪を頭頂で巻いている（第2図・B）。

中年以降は剃髪もしくは五分刈りとする。一方女性には、年齢に関係なく、青年男性と同様の髪型をしている。また、他の蕃族同様、頭には男女とも紺木綿の細長い切れ端を幾重にもターバン状に巻き付けるといふ習俗もみられる。さらに、女性の場合その上に黒い布を掛けることが多い。

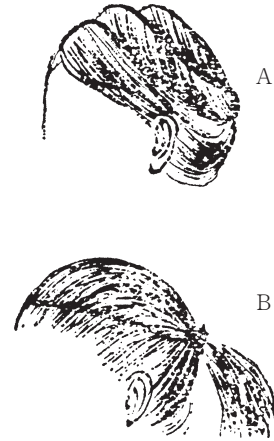
体格は、一般にやせ形であるが、高山蕃よりも胴部に対して脚部が長いという特徴がみられる。男女とも跣足である。ただし、太老閩の女性のみは、自家栽培している麻でつくった脚半 (Pudaga) を付けている \*26。

### 身体装飾

黥面蕃の身体装飾に関する特徴とえば、男女とも顔面に施す入墨が第1に挙げられる。この入墨については、既に上述したので詳細な検討・分析は割愛する。ただし、入墨は首狩りと大いに関連している。そのことから、同様に入墨および首狩りの習俗が確認できる、フィリピンやボルネオなど南方に分布・居住する民族集団との系譜的な繋がりが推察できる。

耳飾りにも、入墨同様黥面蕃の特徴が顕著にあらわれている。耳飾りは男女に共通してみられ、両耳にはほぼ同様の大きさの穴をあける。そこに細長い竹管を突きさす。穴のあけ方は、まず最初幼少時に爪楊枝状の極細い木棒を耳朶に1本さす。その後年齢と共に爪楊枝の本数を増やし、穴を大きくする。女性は、通した竹管に南京玉や貝殻の装飾を付け、目立つようにしている。竹管には太老閩蕃と木瓜蕃の間では相違が見受けられる。太老閩蕃の竹管には、長くて美しい彫刻が施されている。これに対して木瓜蕃の竹管は、短いうえに施されている細工も素朴なものである \*27。

腕には貝殻や真鍮製の腕輪を嵌めている。また首には、植物の果実、貝殻を磨り切ったもの、獸牙、南京玉、ボタンを連貫して飾りとしている。木瓜蕃の女性は人間の歯に小穴をあけ、それを繫いで首飾りにしているものもみられる \*28。な



第2図 青年の結髪

〔出所〕鳥居龍藏 (1897b) 『東部台湾に於ける各蕃族及其分布』、『東京人類学会誌』, 136, 鳥居龍藏 (1976b) 『鳥居龍藏全集 第11巻』, 朝日新聞社, 466より引用。

お、鳥居龍藏は、このような首飾りが世界各地の多数の民族集団にみられることから、首飾りの材料 (物質) によって、かかる集団を次の3集団に分類している。第1は、材料に天然物を用いている集団、第2は、粗悪な人工物を用いている集団、第3は、より精巧な人工物を用いている集団である。そして、これらの3集団の相違は、第1の集団、第2の集団、第3の集団という順に文化の発展段階にそれぞれ対応すると看做したのであった。黥面蕃は、一部が南京玉、ボタンなどを用いているが、これらは中国からの輸入品なので、伝統的にはこれらを用いる習慣がなかった。それ故、上述の区分に従えば、第1の集団の時代か、あるいはごく一部に鳥の足や獸類の爪などを加工して用いていることから第2の集団の時代に想定できるという。

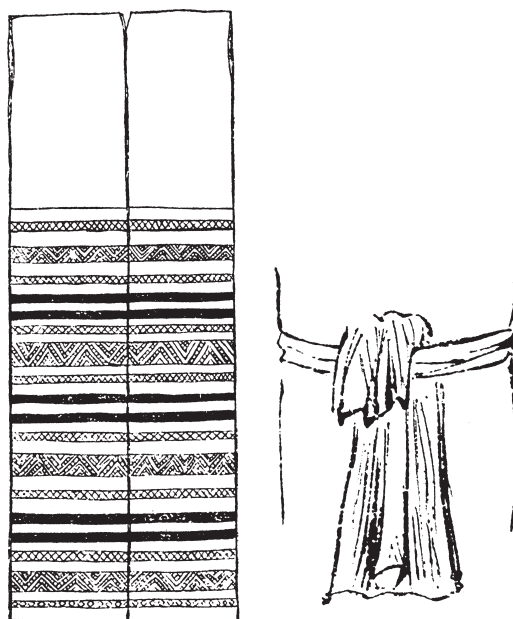
### 衣服

黥面蕃は、既に指摘した如く、麻 (Nuke) を栽培している。この麻は、一般に苧麻 (カラムシ, *Boehmeria nivea*) と呼ばれている。同種類の麻は、わが国でも沖縄や日本各地で栽培されてきた。麻から麻布を織り、それを材料として衣服を



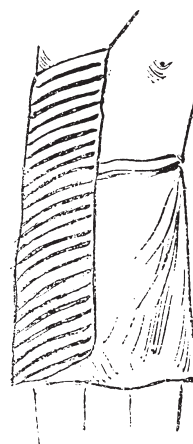
つくる。黥面蕃は、基本的に男女とも上衣を常用し、男性は禪 (Tawack, あるいは Havack), 女性は腰巻き (Putihu lasch) を付けている。上衣は Lukosch と称し、ポンチョ、わが国では陣羽織に類似する袖無しの衣服である (第3図・A)。Lukosch のつくり方は非常に簡単で、麻糸で織った同じ長さの麻布を2枚前後に繋ぎ合わせ、前布を首より腹の所まで開き、その開いた所に首を通すというものである。さらに、その上衣の上に、袈裟状の Pada と称する肩掛けを掛ける。この上衣を着用せず、上半身裸の上に、かかる Pada のみを掛けている場合もみられる。Lukosch および Pada は無地のものもあるが、白色の麻布の間に、赤色や紫色の糸あるいは赤色毛布の解いた糸を加えて、美しい幾何学的な紋様が織り込まれているものもある。このように、色を織り込んでいるのは、漢族との接触・交流以来のこととされる。それ以前においては、Lukosch および Pada は、無地の麻布に褐色に染めた麻布を紋様として織り込んでいた。この褐色染料は、周辺の土地に生えている野生の草根からつくられたものであった。なお、Lukosch および Pada の装飾に関しては、太老閣蕃の方が進化しており、木瓜蕃はより質素であるという。

男性の禪は、細長い紺木綿を尻の上から臍の所で回わし、そこで1つ結び、結び目の残りを長く垂らして陰部を覆う (第3図・B)。女性は、1枚の麻布を用いて腰巻きとする。具体的には、麻布を左から腰に巻き、右に合わせ、この合わせ目を隠すために、1枚の Pada を男性と同様に肩から掛ける (第3図・C)。なお寒い時や睡眠時には大きな布 (蕃布) を身に被り暖をとる。黥面蕃の衣服の特徴は、栽培している麻から糸を紡ぎ、その紡いだ糸を織る織機を所有していることである。この点も、首狩りや入墨同様、南方の先住民族との関連が想起される。



A. 袖無し上衣

B. 禪



C. 腰巻きと Pada

第3図 黥面蕃の上衣と禪

〔出所〕鳥居龍藏 (1897b) 「東部台湾に於ける各蕃族及び其分布」、『東京人類学会誌』, 136, 鳥居龍藏 (1976D) 『鳥居龍藏全集 第11巻』, 朝日新聞社, 466-467 より引用。

### 食料と農業

台湾の先住民族は、鳥居龍藏が調査した時点において、野生植物採集、狩猟および漁撈段階を脱していた。勿論、これらの方法での食料獲得は行なわれていたが、不完全ながらも農業が既に開始

されていた。この点に関しては、上述した如く、衣服の材料とするために麻を栽培していたことから容易に確認できる。黥面蕃も、野生植物採集、狩猟と共に、農業も実施していた。その農業形態は、黥面蕃が山蕃と称されることなどから推察できるように、山中に生活の拠点を置くことと関係がある。すなわち、黥面蕃の農業は山腹斜面などで行なう焼畑農業を主体とする農業であった。焼畑では、粟、陸稻などの穀物、各種のイモ類や豆類が栽培された。これら焼畑で栽培された作物が食料の中心となった\*29。その他、バナナ、ミカン類などの果樹を集落周辺に植えていたが、量的に多くなかった。

上述した作物の収穫に際しては、農具らしきものは用いなかった\*30。ただ、男性が常に腰に差している小刀(Simadtt)を使用して、収穫などの農作業を行なうことがあった\*31。小刀は住居の建築、首狩り、捕獲した動物の処理などにも用いられる。米は、他の民族集団では木臼や杵(縦杵)が普及しているので、それらを使って脱穀、精米が行なわれる。しかし、黥面蕃は、木臼や杵などの道具を所有していない。それ故、脱穀、精米に関しては木でたたいて行なうなど、大変苦労している。鳥居龍藏は、黥面蕃の米を食べてみると、糠がまったく落ちていなかったと記している。

米は粟などの雑穀と同様に、漢族から入手した真鍮製の鍋で水煮して食用としている。煮る場合、細長いレンガ状の石を土間に3個立て、竈の代わりとしている。主食は一般に粟が主体で、米を食用することは少なく、特別の日に食べるという習慣もないようである。その他、栽培した各種のイモ類、捕獲した猪、鹿などの肉、野菜類もすべてこの鍋で煮られた。調味料として塩を用いることもある。しかし、山岳地帯で入手が困難なこともあり、少量使用されるか、使われないこともある。野菜に関しては、トウガラシや塩をつけ

て食べることが多い。このように、食料の調理方法は至って簡単で、その種類も少ない。土器を製作する技術がないので、食具としてはヒョウタン、竹、バナナの葉などが利用される。ヒョウタンは乾燥した果実を利用するが、そのまま酒の徳利、また切り方によっては椀や盃にと利用価値はすこぶる高い。竹は節を抜いて水を運搬するのに用いたり、コップの代わりにする。バナナの葉は皿の代用としている\*32。なお、太老閣蕃は、ボルネオの先住民族などと同様、刈り取った髑髏から酒の器をつくるという習慣がみられた。

鳥居龍藏によれば、農業の発展は居住している住居と、収穫した穀物などを収納する倉が分離しているか、どうかで判断することが可能になるという。黥面蕃の場合、木瓜蕃がTakaschと称する穀物倉を住居とは別に設置しているというように分離している\*33。穀物倉は、湿気を防ぐことや、ネズミに貯蔵物が食べられないように、床を高くし、床柱に木の鏝を付けるいわゆるネズミ返し構造となっている。このように、柱に鏝を付けるという習慣は、伊豆大島、奄美大島にある穀物倉と共通しているという。

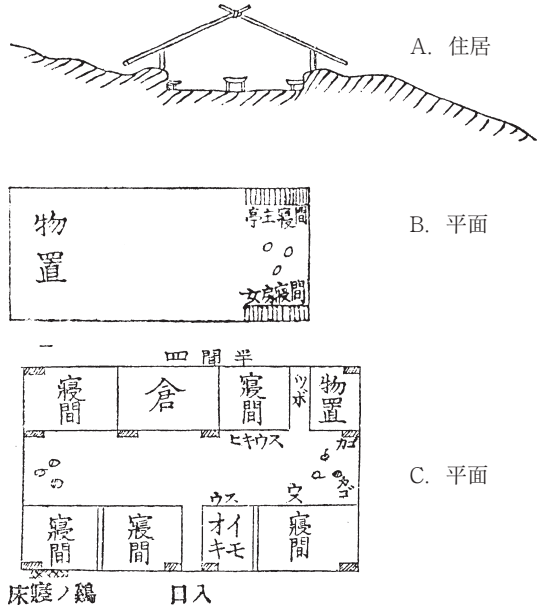
### 住居

台湾に分布・居住する先住民族は、社と呼ばれている集落を形成する。社は住民が寝起きする、日常生活の中心となる家屋すなわち住居を主体に形成される。台湾の先住民族の場合、山蕃つまり山岳地帯に分散する先住民族が典型となるが、住民が密集する、いわゆる集村と称される形態が多い。防御に有利だからである。しかしながら、防御上有利であるからといって、大規模な集落は非常に稀である。生活資料の獲得が困難だからである。かような一般的傾向がみられる台湾の先住民族の住居なのであるが、先住民族間ではその形態に相異が確認できる。

この点に関して、鳥居龍藏は、フィールドサーヴェイの中心であった台湾東部では、「不完全な

がらも日本の片田舎の百姓家ぐらいの家は作って居る」が、住居がをもっとも進化していないのが黥面蕃で、もっとも進化しているのは阿眉蕃である。そして、その中間に位置するのが高山蕃であると明言している。その理由は、住居の内部構造にあるとする。つまり、その内部構造が複雑なほど進化しているとみるのである。住居の内部構造をメルクマールにすると、黥面蕃の住居はもっとも進化せざる家屋となるのである。以下では、黥面蕃の住居の主として構造上の特徴を具体的に把握しようとする目的から、中間に位置する高山蕃との住居の比較を行なう。

黥面蕃の住居は、山腹斜面の傾斜が比較的緩やかな場所に建設される(第4図・A)。住居はいわゆる竪穴式住居である。すなわち、地面を1から2尺(約30~60センチメートル)掘り下げ、その周囲に柱を立てる。このように、掘り下げた地面に家屋を建設するのは、夏季を中心とする暑さを防ぐためである。入口(玄関)は1ヶ所のみで、室内に入るには段差がある。そのため梯子が1本置かれている。梯子は切り目梯子と称されるもので、1本の丸太に切り目を階段状に入れたものである。室内の構造は非常にシンプルである(第4図・B)。すなわち、室内は土間形式のワンフロアで仕切りがない。土間の一方の端に3個の石を円形に立てた竈状のものが1基ある。その前後には、長さ1間半(約2.7メートル)、幅1間弱(約1.5メートル)の上部に竹を張ったベッドが置かれている。夫婦専用のベッドである。夫婦以外の家族は土間の上に直接鹿皮を敷いて寝る。寝るときには毛皮状の蕃布を掛ける。他の端は穀物倉の役割を担う物置となっている。武器<sup>\*34</sup>や鍋などの日用品は壁に掛ける。窓がないので明りは竈の火で代用される。それ故、火は年中絶やすことがない。防虫を兼ねているためでもある。飼っている犬も土間で家族と共に寝る。壁は細い丸太を藤で束ね横に並べてつくられる。また屋根は切妻型で



第4図 黥面蕃の住居(A, B)、高山蕃の住居(C)

(出所) 鳥居龍藏(1897c)『東部台湾諸蕃族に就て』、『地学雑誌』, 9-104, 105. 鳥居龍藏(1976d)『鳥居龍藏全集 第11巻』, 朝日新聞社, 498, 500より引用。

カヤ(Koshkosh)で葺かれている。西部の黥面蕃では、壁や屋根は其に細い竹を縦に並べてつくられることが多い。さらに室内には、狩り取った頭髪や耳などを入れた袋(Pudin)を天井から吊している。住居の傍には、狩り取った首を置く首棚が設けられているのをよくみかける。近くには、上述したように、穀物などを収納する高床式の穀物倉も独立して設置されている。

高山蕃の住居も基本的な構造は黥面蕃の住居と同様である。住居を建てる場所は、黥面蕃のように比較的緩やかな平坦地に近い場所ではなく、背後を山側に接するように建設する。また壁はすべてヨシ(Lyack)で、屋根はカヤで葺くことが基本となる<sup>\*35</sup>。入口は、同様に1ヶ所であるが、軒先が非常に突き出ているので、屋根を潜るようにして室内に入る。室内は黥面蕃の住居同様1尺5寸(約50センチメートル)ほど掘り下げている。そのため、3段の階段が切られている。柱も丸太でなく、楠の薄板を用いて柱としている(第4

図・C)。この柱には人形が彫刻されている。室内は土間が基本であるが、両壁に沿うようにして、ベッド、物置、穀物などを収納する場所（倉に相当）、イモ類などを貯蔵する場所など用途別の床が置かれている。これらの床は土間より若干高く、上部には竹が敷かれている。土間には黥面蕃の土間ではみられない石臼が置かれている。武器類は第4図・Cにはみられないが、壁に整理して掛けられている。軒の高さは成人が立つことのできるぐらいの高さであり、中央部の天井は1丈（約1.8メートル）以上ある。なお、入口の横には飼育しているニワトリの寝所の棚が置かれている。このように、高山蕃の住居は黥面蕃同様ワンフロアの土間形式であるが、内部の構造は多少複雑になっており、機能的である。

なお、阿眉蕃の住居は竪穴式ではなく、高床式となっており、室内もワンフロアであるがより機能性が高い。また、穀物倉は家屋と別に建てられている。住居の特徴としては、一部の支系（亜集団）が土器を製作しているので、室内に皿、鍋など用途別の土器が置かれていることである。

### 土器

黥面蕃は土器を製作する技術を有しない。このように、台湾に分布・居住する先住民族のほとんどは土器を製作できない。しかしながら、阿眉蕃の支系である北部集団および新高蕃の1支系阿里山蕃（阿里集団）は土器を製作することができる<sup>\*36</sup>。阿眉蕃はかつて盛んに土器を製作していたが、現在では上述した北部集団のみが製作に従事している。主要な製品は、酒を盛る高盃や皿、鍋など日用品が中心である<sup>\*37</sup>。阿里山蕃は、黥面蕃同様、以前は盛んに土器を製作し、使用していたと推察される。現在では製作できる住民は非常に減少し、20余社ある阿眉蕃最大規模の社（Tappan）においても、製作できるものはわずか2名であるという。既に述べた如く、鳥居龍藏は、阿里山蕃をミャオ族と類似性をもつ民族集団

と看做しているので、阿里山蕃の土器製作について具体的に論じていく。

現在 Tappan 社で製作されている土器は1種類のみである。この土器は、祭日当日に製作される土器で、粟酒を入れて精霊に捧げられる壺状の器であり、儀礼に欠かせないものである<sup>\*38</sup>。製作は男性ではなく女性に限られる。その工程は以下の通りである。

作業に入る前に準備を行なう。その準備とは、材料とする土（Chewa）の採取である。土は集落周辺のものではなく、近く山の頂上付近の特定の場所から採取したものに限られる。採取した土は住居の隣りに敷いた板に置かれる。板は細い竹を藤で束ねた長方形の敷物である。製作する女性は、板の上に両足を広げて座る。板の上には握り拳大の丸い石が2個置かれている。この石が唯一の製作道具である。まず、土を両足の間に置き、石で叩いて柔らかくほぐし、水を加えてよく練り、頭ぐらいの大きさに丸める。その後の作業は、次のような順で実施される。

①丸くなった土を上方から石を押しつけ、土の中に押し込む（第5図・A）。そうする作業を行なうと土の断面は第5図・Bのようになる。

②土の中に入れた石を指で動かし、内の空洞を拡大する（第5図・C）。

③入れた石を取り出す（第5図・D）。

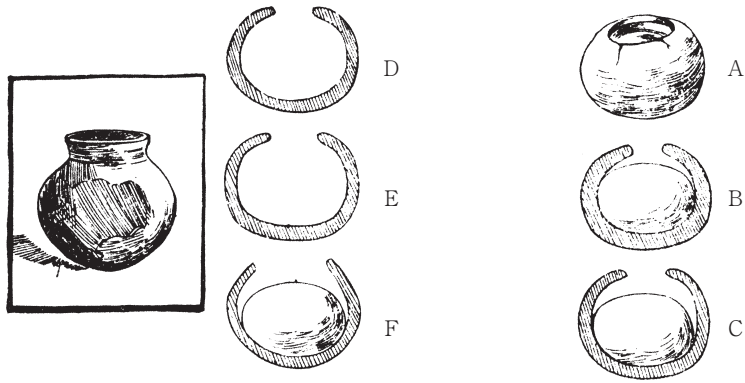
④再び取り出した石を入れ、内部から胴部の張りを出す（第5図・E）。

⑤さらに、他の丸石で外側を叩くなどして型を補正する（第5図・F）。

⑥中の石を取り出し、手で口をつくる（第5図・F）。

上述のような工程で製作された土器は、少々天日で乾かしてから、盛んに火を起こした竈の中に入れる。このとき土器全体に火が当たるように注意を払う。数時間焼くと完成する。

このように、阿里山蕃の土器製作は非常に作業



第5図 阿里山蕃の土器作りの工程

〔出所〕鳥居龍藏 (1901)「台湾阿里山蕃の土器作り」、『東京人類学会誌』, 136. 鳥居龍藏 (1976d)『鳥居龍藏全集 第11巻』, 朝日新聞社, 559より引用。

が簡単で、道具らしい道具は使用しない。それ故、製作については大変熟練した技術を必要とする。この点こそが土器製作の後継者が育たない理由とされる。なお完成した土器には文様を付けない。いわゆる「手づくり」法と称せられている手法である。

### 3. ミャオ族調査の特徴

前項において、やや詳細にミャオ族調査の目的と関係があると看做される台湾調査に関して論じた。すなわち、調査の目的およびミャオ族との関連あるいは同一集団であるかも知れないという類似性をもつと推定した黥面蕃、阿眉蕃の特徴を検討してきた。以上の考察を受けて、ミャオ族の特徴について、分析を加えることにする。ミャオ族の特徴が把握できれば、調査の目的が具体的に判明すると考えられるからである。しかしながら、鳥居龍藏のミャオ族調査は内容が多岐に亘っている。それ故、黥面蕃、阿里山蕃同様、衣・食・住を中心とした物質文化を中心に展開することにする。信仰や思想などに代表される精神文化よりも、物質文化は眼につき易い、と推察できるからである\*39。

鳥居龍藏は、明治35年(1902)から翌36年にかけて、単身で西南中国調査に出かけた\*40。上

述した如く、西南中国調査は、千島列島占守島調査と同じく、4次に亘る台湾調査の途中で実施された。台湾調査との相違は次のようであった。第1は、自らがその後の調査を予定していたが、1回のみ調査に終わったこと。第2は、鳥居龍藏個人の強固な意志、かつ単独で調査を実施したこと。第3は、外国人研究者の掣に習い、正式の調査報告書と共に一般読者を対象とした旅行記を出版したこと、の3点であった。とくに、第2点の自らの意志、かつ単独で調査を実施するという調査パターンは、鳥居龍藏のフィールドサーヴェイの大きな特色といえる。そのため、自らが興味・関心を有した事象に対して、詳細な調査が可能となったのである。以上の点に留意して論を進めていく。

鳥居龍藏が西南中国を踏査旅行した目的は、上述の旅行記の中で、「全く人類学上の研究調査である」と明言している。というのは、西南中国においては、人類学的調査が必要とされる動機があるとす。その動機とは、この点も既に指摘したのであるが、「台湾の生蕃のあるもの(黥面蕃など—筆者註)と、南シナ海の蛮族(ミャオ族のこと—筆者註)との間に何らかの交渉が無かるうかということ」が第1の点である。第2の点としては、この時調査を実施した南シナ海すなわち西南

中国には、ミャオ族が居住していることが、「書経」などの古書に記載されている。にもかかわらず、日本人研究者は、ミャオ族が現在どこに居住しているのか正確な場所を知らなかったし、学術的な研究もなされていなかった。一方、ヨーロッパ人の宣教師や研究者は、この地域の言語、土俗（民俗のこと——筆者註）、歴史などに関心を持ち、旅行記や研究書の出版もみられる。この日本人研究者の学問的な空白地域を調査することで、学問的に貢献したいという理由からである。とりわけ、人類学上の調査に従事するのであるから、第1の動機とも関連するミャオ族が調査の中心となるのである。鳥居龍藏のミャオ族調査では、次のような成果を挙げている。

#### 身体的特徴

ミャオ族調査の特徴は、身体的特徴に典型的にみられる如く、最初に研究対象であるミャオ族を観察し、その後対象者個人の測定を実施するという、形質（自然）人類学的手法によるものである。このような調査手法は、恩師坪井正五郎の影響であると推察される。前述したように、坪井正五郎は東京帝国大学理科大学人類学教室の主任教授であった。鳥居龍藏は、坪井正五郎から学問的薫陶を受けていたのである。すなわち、坪井正五郎の人類学は、人間の身体的性質などを主として研究する形質（自然）人類学と、人間の文化的側面を中心に研究する文化人類学の両研究分野を研究領域としていた。現在では、かかる両分野は明確に分離し、それぞれ独立している。しかし、人類学の研究が現在ほど進展していなかった当時では、人類学研究者にみられる傾向であった。それ故、鳥居龍藏は、形質（自然）および文化の両人類学に関する学問的知識を修得していた。そのため、身体測定など形質（自然）人類学研究者が用いる調査手法を身に付けていたのである。

身体測定の対象として、ミャオ族の各支系（亜集団）の老人および成人以下の男性を除く成人

（丁年）男性が選ばれた。人数は40名であった\*41。測定場所は、ミャオ族の集落および政府の役所（官衙）で実施した。また測定の時間は午前10時より午後3時頃までの日中であった。鳥居龍藏は、身体的特徴すなわち体質に関しては、身体観察と身体測定に分け、分析・検討している。身体観察は皮膚の色、体毛など23項目に、身体測定はさらに2分して実施した。すなわち、その第1は頭部および顔面で、頭最大長、鼻広など14項目、第2は体型で、身長、胴長など31項目を測定した。以下では、これらの身体観察および身体測定に関して、ミャオ族の特徴がとくに顕著に確認できる項目数点に限定して検討していく。

#### a) 身体観察

最初に注目されるのは皮膚の色である。皮膚の色に関しては、外国人研究者が黄色ではなく暗黒色である、つまり、ミャオ族はモンゴロイド（黄色人種）ではないとする記述や説が多い。また鳥居龍藏は、西南中国に関心をもつ研究者の一人であるBlakiston, T. W.が、その著“*Five months on the Yang-tze*”（1862）の中で、ミャオ族（Miautze）と指摘している民族集団は、ミャオ族ではなく猓族（イ）族であるとしている。このように、ミャオ族を猓族として紹介、記載するのは、Blakistonにはじまるという。

鳥居龍藏は、皮膚の色を調査する場合、対象者の身体が比較的日光を受けていない箇所を選び、Broca, P. が考案した「皮膚色表号」に従って測定した\*42。測定したのは40名の調査者の内15名であった。皮膚の色は黄色であるが少々赤味を帯びているという結果を得た。それ故、Blakistonが唱える暗黒色ではなかった。この点からも、ミャオ族はモンゴロイドの特質を具備していると断言できるとした。

頭髮は黒色、直毛である。また毛が細く、量も多い。これらのことからモンゴロイドであるこ

とは明白で、他の集団の血が混じっている痕跡はみられない。また、髪は「史記」,「漢書」などの古書にも登場する推髪である。推髪とは頭髪を額上において丸く結ぶ髪形をいう。ほとんど年齢に関係なくこの髪形をしている。さらにその上に細長い黒布やたまには白布でターバン状に頭を巻く。子供は、「お河童」頭にして、頭の周囲を截り、後ろは肩付近まで長く垂らす。女性の髪形は各支系(亜集団)により、以下のような違いがみられる。

①男性同様、推髪の髪形をする型。例、白ミャオ族、黒ミャオ族。

②頭の周囲を剃髪し、中央で推髪する型。例、青ミャオ族。

③頭髪に細長い布を置き、それを周囲に巻き付ける型。いわゆる鉢巻きのような形になる。例、貴州省中央南部青岩付近の花ミャオ族。

④頭髪を左で2つに分け、後頭のところで髪を「の」の字形に巻き付ける型。例、貴州省西部朗岱付近の花ミャオ族。

⑤頭髪に別の毛を加えて、頭髪を増やし、櫛で髪を巻き付ける型。例、貴州省中央部安順付近の花ミャオ族。

顔形は概ね円形を呈している。しかし、下顎が突起しているものもみられるため、方形とみられることもある。眼形は明白なモンゴロイドとしての特徴をもつ。この点は、虹彩が暗黒色であることからいえる。鼻形は全体としてあまり高くない。鼻翼は中程度、もしくは広い。また鼻孔も中程度で、鼻柱はやや窪んでいる。これらの特徴を総合すると、漢族との類似が著しい。

足部は、幼児より草履のようなものを履く習性があるため、「土ふまず」が発達しているという、一種の変形がみられる。全体としては扁平である。

## b) 身体測定

頭部および顔面部の測定は、前述したように、

多くの箇所(部位)に及ぶ。その中でもミャオ族の特徴として注目される項目に焦って検討する。なお、測定については、ミャオ族の支系(亜集団)別に行なっている。

頭最大長は、花、青、白、打鉄、狛家の各ミャオ族40名を測定した\*43。その内23名が花ミャオ族であった。平均は185ミリメートル、最長は196ミリメートル、最短は169ミリメートルであった。同様に青ミャオ族は7名を測定した。平均は185ミリメートル、最長は190ミリメートル、最短は182ミリメートルであった。このように、頭最大長に関しては、各支系(亜集団)間で若干差が確認できるが、あまり差がなかった。全体の平均は185ミリメートルであった。最長、最短は共に花ミャオ族であり、それぞれ196ミリメートル、169ミリメートルであった。鼻長については、花、青、白、狛家の各ミャオ族28名を測定した。その中で花ミャオ族がもっとも多く17名で、平均は45ミリメートルであり、最大は51ミリメートル、最小は37ミリメートルであった。

体部については、測定された箇所(部位)の中でも、ミャオ族の特徴として注目されるのは、身長、胴長、足長の3項目である。身長は花、青、打鉄、狛家の各ミャオ族30名が測定された。その中でも花ミャオ族は15名が測定され、もっとも多かった。花ミャオ族の平均は1.55メートルで短身\*44である。最高は1.66メートル、最低は1.54メートルであった。以上の数値から判断すると、ミャオ族の身長は典型的な短身であるといえる。

胴部は花、青、白、狛家の各ミャオ族17名を測定した。その中でも花ミャオ族と青ミャオ族はそれぞれ7名ずつ測定した。平均は51センチメートル、最大・最小とも青ミャオ族で、それぞれ63センチメートル、45センチメートルであった。

足長も胴部同様、花、青、白、狛家の各ミャオ族17名を測定した。その内花ミャオ族は7名を

測定した。その平均は243ミリメートルで、最長は257ミリメートル、最短は227ミリメートルであった。青ミャオ族も同様に7名測定した。平均は247ミリメートル、最長は257ミリメートル、最短は235ミリメートルであった。平均では最長が、花ミャオ族および青ミャオ族の257ミリメートル、最短は白ミャオ族の217ミリメートルであった。

以上、観察および測定からみたミャオ族の身体的特徴は、以下のものである。すなわち、ミャオ族全体としてはモンゴロイドの特徴を示している。また皮膚の色、頭形、顔形、身長など個々の特徴から判断すると、ミャオ族はアジア南部に分布するモンゴロイドに類似しているという結論が得られた。

### c) 身体装飾

鳥居龍藏も報告しているように、ミャオ族の身体装飾としては、耳輪と首輪が注目される。その理由の1つに、これらの装飾品の材料(原料)として銀が使用されていることが挙げられる。これらの装飾品は、数少ない、各家庭に受け継がれてきた貴重な財産だからである\*45。耳輪は、黠面蕃など台湾の先住民族同様、耳朶に穴を穿て、そこに輪を挿入する。耳輪には2種類の異なったものがみられる。ブドウの果実のような総型のもので、一般にみられる円形の耳輪である。前者の総型ものは、美しいが非常に小さい。後者の耳輪は大・小みられるが、大きいものは下顎に達するほどもある。これらの耳輪は、いずれもその先端を渦形に巻くという特徴が共通している。材料は銀が中心であるが鉛を使用したものもみられる。銀はミャオ族居住地区では大量に産出しないので、定期市などで物々交換したものであろう。

首輪もほとんどの女性が所有している。数個所有しているものもある。材料は定期市などで入手した針金を使う。耳輪同様、近くに住んでいる漢族などに依頼してつくってもらったことが多い。先

端は渦形あるいは菱形に巻いたり、輪を網のように数本の針金で縫ったものもある。また「ハレ」の日などには、首輪とは別に、漢族から購入した銀製の鍵などの飾り物も吊していることが多い。

頭には被り物がみられる。男性の場合、前述した推髪の上に、ターバン状に細長い布を巻いている。酋長などの有力者は、馬の尻毛で編んだ鳥打ち帽子のようなものを被っている。女性は大きく2種類の被り物がみられる。わが国の「法師頭巾」のような形をしたものと、男性同様黒色や白色の細長い布をターバン状に巻くものである。前者の被り物は、青岩付近に住む青ミャオ族にみられ、地域的にも限定される。後者の被り物は、布を橋のように頭上の左から右にかけて掛ける型、広い巾の布をそのまま頭上に巻く型、男性にみられる「法師頭巾」のように巻く型と、頭上に布を高く巻き上げる型、布を鉢巻状に巻く型の5つの型に区分できる。それぞれの型は、最初の橋のように巻く型が朗岱付近の狛家ミャオ族にみられるというように、各支系(亜集団)が特定の被り物を着用する場合も存在するが、各支系(亜集団)ごとの明確な違いは認められないようである。なお、とくに注目されるのは、打鉄ミャオ族の少女に限られるのであるが、赤、黄、青、緑など種々の色を混ぜた布で鳥打ち帽子のような被り物をつくり、これに丸形の銀製の装飾品を付けている。この被り物は非常に美しいので大変目立っている。

### 衣服

男性は、鳥居龍藏の調査時においても、漢族風の衣服、すなわち上衣とズボンを着用しているものが多くみられる。しかし、伝統的な民族衣服を常用しているものもある。これら伝統的な衣服は、各支系(亜集団)とも基本的に同じ形態のものを着用している。その衣服とは、裾がほとんど足の上まで達する長衣である。この長衣は右衽で、袖は長く手を覆うほどである。仕事の際は、



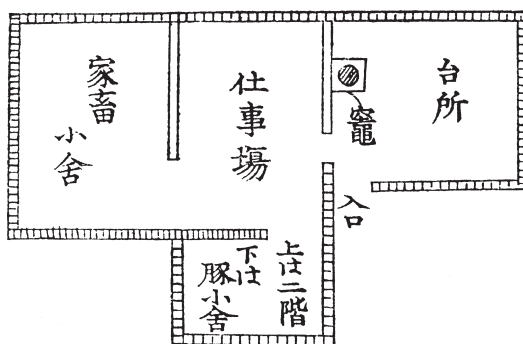
この長い袖は不向きなので、先端を折り畳む。帯は、わが国の真田織のようなものを作成し、後方で結び、両端を長く垂らす。また前垂れを掛け、腰には短い股引のようなものを穿く。脚部には脚絆を巻く習慣がある。

女性の衣服は男性と異なり、ほとんどが日常生活においても伝統的な衣服を着用している。すなわち、筒袖の上衣を襜を取った短裾（短いプリーツスカート）のツーピースが基本である。各支系（亜集団）とも同様の衣服を常用している。前垂れを掛けているものが多い。衣服の着用には地域差がみられる。例えば、海拔高度が比較的高い朗岱付近に居住するミャオ族は、筒袖の上衣を着用しているが、その上に胴衣を重ねて着る。上衣、胴衣とも右衽で、裾は長く足まで達するほどである。また前垂れも掛けている。以上のように少し厚着となっている。なお、上述したように、ミャオ族の各支系（亜集団）は、青ミャオ族の女性は青色の短裾を常用するというように、支系（亜集団）ごとに明確に異なっている。花ミャオ族は、上衣に花柄の美しい刺繍を施しているため、このような名称で呼ばれている。衣服の材料は、伝統的には自家栽培の麻から取った麻布を使用していた。しかし現代では、定期市などで購入した綿糸が普及し、その綿糸で織った綿布の衣服が多くなり、麻布の衣服の着用が非常に少なくなっている。

### 食料と農業

ミャオ族の生業の中心は農業である。そのため、食料も植物性のものが主体となる。具体的には米、粟、トウモロコシ<sup>\*46</sup>などの穀物を常食としている。豚や鶏などを飼育しているが日常的にはほとんど食べることは少なく、とくに豚は儀式のときのみ食される。

集落は、家屋が非常に密集する集村である。山間部を中心に居住しているが、集落周辺には水田が開かれている。水田の多くは山腹斜面上に造成



第6図 ミャオ族の一般的な住居（平面）

〔出所〕鳥居龍藏（1897c）『東部台湾諸蕃族に就て』、『地学雑誌』、9-104、105、鳥居龍藏（1976d）『鳥居龍藏全集 第11巻』、朝日新聞社、498より引用。

された棚田である。畑も小規模であるがみられ、各種の野菜を中心に栽培している。耕作に関しては水牛が大きな役割を占めているが、棚田では黄牛と称される黄色の毛の牛も利用されている。これらの農業に関しては、用いる農具を含めて、ミャオ族が集中して居住している貴州省に住む漢族とほとんど変わらないと指摘している<sup>\*47</sup>。

### 住居

貴州省は、西に隣接する雲南省に跨がる雲貴高原上に位置している。雲貴高原は、世界最大ともいわれている熱帯カルスト地形が卓越している。地質は石灰岩が主体となっている地域が多く、地味は豊かとはいえない。それ故、樹木が豊富に繁茂しているとはいえない。このような自然環境のため、住居すなわち家屋の建築にも多大の影響がみられる。すなわち、家屋の中心である柱および棟木以外は、ほとんど石材を利用して建設されているという特徴を有している。家屋は、以下のように大きく2つの形態がみられる。

第1の形態は、ミャオ族居住地区で一般的にみられる住居である。屋根は切妻造りで、茅葺きである。壁は四角い石を積み上げて造成される。入口は1ヶ所で窓はない。室内は完全とはいえないが、2階にもある（第6図）。2階部分は、主として米、粟などの穀物を収納する倉庫の機能をもつ

ているが、寝室にも利用されている。間仕切がないワンルームである。2階への登り下りは梯子で行なう。1階部分は土間形式で、不完全ではあるが各部屋は間仕切られており、用途別になっている。つまり、台所、仕事部屋、家畜小舎、豚小屋に分かれている。台所では煮焚きを行なう竈が1基設けられている。仕事場には、鎌、鍬など農作業に使用される農具などが収納されている。水牛あるいは黄牛、鶏などを飼育する家畜小舎と、豚を飼育する専用の豚小舎は完全に分離している。屋根は傾斜が急であり、前述したように茅が葺かれているが、スレート状の平らな石を置くことが多い。

第2の形態は、樹木が豊富な雲南省東部にみられる住居である。家屋の外形は長方形で、周囲の壁は第1の形態とは異なり、すべて丸太を横組にして並べ、その上に土を塗っている。いわゆる土壁である。また家屋の構造はわが国の校倉造りに類似している。室内は明確に1階と2階とに分かれている。1階部分は土間となっている。部屋割りは基本的に第1の形態と同様で、台所兼物置、仕事部屋、家畜小舎からなっている。相違点は、豚小舎が室内になく、家屋の前方あるいは横に専用の小さな小屋が建設されている。2階は、収穫した穀物を置いたり、寝室となっている。屋根の傾斜は第1形態の屋根よりも急で茅で葺く、茅葺き屋根である。また屋根には風よけのための「干木」をおいている。建築には釘を1本も用いず、すべて蔓で括っている。一見わが国の上代の家屋と同じようにみえる住居である。これらの家屋が集合する集落は、近くに河川などの水源がある丘陵上に位置していることが多い。

以上ミャオ族の特徴を、注目すべき項目に関して、分析・検討を行なった。その結果、ミャオ族は頭髪、身長など体質については、モンゴロイドであり、安南（現ベトナム社会主義共和国）付近の民族、すなわちインドシナ民族と類似点があるこ

とが判明した。この点については、身体装飾、衣服、住居などの土俗からも確認できた。

#### 4. 黥面蕃、ミャオ族調査からみた特徴の比較

鳥居龍藏は、台湾および西南中国に限らず、幾度となく海外調査を実施した。海外といっても、フィールドサーヴェイの中心は日本列島周辺地域であった。かように、調査対象地域が限定されることになったのは、鳥居龍藏が抱えている問題意識と大いに関連していると推察する。海外であれば、調査地域を問わないことにはならないのである。すなわち、鳥居龍藏の念頭には、絶えず日本列島に居住する日本民族のことが去来したのであった。この点は本稿の論旨と関連がとくに深い\*48。それ故、以下において再度端的に論じておく。

台湾および西南中国に住む先住民族つまり少数民族に関する調査は、上述した確認を得るために実施されたといっても過言ではないのである。日本民族に直接関心を有するようになったのは、台湾調査の間に実施した、千島列島占守島の調査に依ることが大きい。占守島調査は、恩師坪井正五郎の依頼で行なったが、その調査内容が、日本民族の起源に関するアイヌ＝コロボ（ポ）ツクル論争の決着に多大の影響を与えることになった。この調査を契機として、日本民族の起源を含む日本民族全般について、より強い関心をもつようになったのである。

台湾調査は、直接には千島列島占守島調査同様、坪井正五郎の代理として行なったという共通点がある。それ故、両調査は本人の意志と関係なく実施された調査であった。鳥居龍藏は、上述した理由から、台湾調査を占守島調査以上に、日本民族との関連に留意して行なった。このような学問的関心があったからこそ、他の専門分野の諸教授に遅れを取らないことは当然のこと、大変精力

的に集中して調査することになった。さらに、台湾の先住民族研究に関する先行研究として読んだ de Lacouperie の学説に大いに共感を得たことも考慮する必要がある。

鳥居龍藏は、以上論じた視点から、台湾の先住民族調査に取り組んだ。調査は、他の専門分野の調査との関係もあり、自らが興味・関心をもつ黥面蕃を中心とした調査は許されない。台湾に分布・居住する先住民族全般に対して、幅広い総合的な、いわゆるエクステンシヴな人類学的調査が要求される<sup>\*49</sup>。この点に関して、先住民族の支系(亜集団)を9集団として区分したことが挙げられる。この鳥居龍藏の区分は、現在でも台湾の先住民族を区分する場合の基本とされている。

黥面蕃に関しては、台湾のすべての先住民族に該当するのであるが、先行研究がほとんどみられない。学問的には空白・未開拓の研究分野であった。それ故、かかる空白な部分を埋めるためにも調査は上述したエクステンシヴな方法とならざるを得なかった。しかしながら、黥面蕃調査では、調査内容に関しては他の先住民族調査同様、非常にオーソドックスな人類学調査を行なう。すなわち、調査対象地域は台湾東部地区が中心となるが、皮膚の色をはじめとする身体的特徴などの形質(自然)人類学的調査から、耳輪や首輪などの身体装飾や衣服、住居などの土俗を中心とする文化人類学調査まで総合的に行なった。対象としたのは、全住民が黥面蕃で構成される太老閣社および木瓜社の2集落であった。

具体的には、前者の住民を太老閣蕃、後者の住民を木瓜蕃とそれぞれ称し、両者の比較を行なった。比較は台湾の先住民族全般を調査する必要からか、聞き取りを中心とした観察であった。その中でも、とくに関心を有したのは、入墨と首狩りであった。前者の入墨は、民族名称が顔面に入墨を入れる黥面となっていることから、黥面蕃の最大の特徴と看做されるからである。さらに鳥居龍

藏は、北海道の先住民族アイヌが入墨を知っており、とくに強い関心をもったのである。

首狩りは、御雇い外国人である Morse, E. S. が、大森貝塚の住民が食人の風習を有していたと主張したことがあった(寺田1981:18-19)。そのような理由から首狩りに関心をもったものと推定される。しかし、この点に関しては、de Lacouperie, T. 説によって、黥面蕃をはじめとする台湾の先住民族は、より南方に分布・居住するインドネジアン(マレー人種)に所属すると推定した。このインドネジアンの特徴の1つが首狩りであることも、首狩りに関心をもつことになったと思われる。

黥面蕃は、首狩りを行なうことなどから、台湾の先住民族の中でももっとも猛悪な民族集団とされ、非常に危険な集団と認識されていた。それ故、調査は困難を極めた。しかし、調査から判明した注目すべき特徴は、次のような点であった。身体装飾の中では首飾りが注目される。山瓜蕃は、その材料に玉や動物の牙を用いている。この事実は、古代の日本民族が曲玉や動物の牙を使用して首飾りにしているという共通点がある。同様に農業に従事し、粟や米などを常用としている点も類似している。このように、鳥居龍藏は、黥面蕃の調査において、古代の日本民族の習俗と多くの共通点すなわち類似性が認められることを発見したのであった。

その結果、黥面蕃に代表される台湾の先住民族に関しては、

①鍋など金属器の使用がみられる。この点は武器なども同様で槍先、刀(小刀)などには鉄器が用いられている。

②住居に住み、不完全であるが農業に従事し、家畜を飼育している場合もある。

ということが判明した。以上のことを総合してみると、黥面蕃を筆頭に台湾の先住民族は、彼らの

位置すなわち進化の段階でいえば、一般に想像されているように野蛮の集団とはいえない。野蛮を脱しかけた集団と看做することができる。その理由は、農業の発達をメルクマールとすれば、「彼らは明らかに農業をして居る人民である」であるという。

ミャオ族の調査は、既に述べたが、台湾の先住民族の調査とは大きな相違がみられるとされる。すなわち、ミャオ族調査は、鳥居龍藏自らの強い意志で出かけたのであった。一方台湾の先住民族の調査は、坪井正五郎の代理として調査に従事したからである。確かに両調査については、このような相違が確認できることは事実であるが、ミャオ族調査の強い意志をもつ理由として、台湾の先住民族調査が影響を与えているといえるのである。この観点に立てば、対象地域こそ異なるが台湾の先住民族調査と、ミャオ族を筆頭とする西南中国調査は、一連の調査であると看做することができる。鳥居龍藏がこのような見解に到達したのは、日本民族の起源など日本民族全般に関して、日本列島だけでは解決することが不可能であろうことが推察される。

そこで、鳥居龍藏は、日本民族と系統的に近縁であると想定される、日本列島周辺に分布・居住する民族集団に眼を向けることになる。台湾の先住民族の調査は、かような視点からも調査が進められたのであった。そして、台湾調査との関連かあるいは延長として、西南中国に居住するミャオ族などの少数民族調査を執行したのであった。そうであるからこそ、鳥居龍藏の海外におけるフィールドサーヴェイは、日本列島周辺地域にほぼ限定されることになるのである。

ミャオ族調査は、上述したような学問的に非常に広大な展望の上に立って実施されたのである。ただし、台湾の先住民族調査においてもある程度相当するのであるが、ミャオ族など西南中国の少数民族に関する研究は、先行研究がほとんど存在

しないという学問的な状況であった\*50。

とはいうものの、台湾の先住民族調査とは異なる点もみられる。既に指摘した如く、ミャオ族調査では、詳細な調査報告書および調査記録に基づいた旅行記の存在である。これらの著作の出版は、ある意味ではヨーロッパ人の人類学研究者にみられる、人類学調査の伝統的な研究手法といえる。さらに、それに加えて、調査に出発する前に、日本で入手しうる関連書籍をすべて読破するほど、文献上の検討を行なった。このように、調査対象地域に入る前に、関連書籍に当たるという作業は、現在でも、文化人類学を筆頭に、フィールドサーヴェイを基盤とする諸科学分野では基本的な作業となっている。そのような作業を実施することで、対象民族であるミャオ族に対して、事前に正確な知識を取得していたのであった\*51。

ミャオ族調査を検討・分析してみると、上述した書籍など文献調査と共に、調査に使用する測定器具などの器具類を十分に揃えて出発した。かかるミャオ族調査の成果は、大部な著作「苗族調査報告」(鳥居 1907, 鳥居 1976d: 1-280)として結実している。同報告書には、形質(自然)人類学および文化人類学の両分野に関する内容がバランスよく記載されている。しかしながら、より注目されるのは、調査対象者から得られた数値を、調査項目別に表示していることである。表示することによって、さらに観察の資料をも加えることで、調査対象民族であるミャオ族に関する客観的な状況が正確に把握できることになる。このような調査対象民族に対する客観的な資料を作成することで、ミャオ族の実像に迫ることが可能となったのである。この点は、観察重視のフィールドサーヴェイを行なった、台湾の黥面蕃など先住民族研究との大きな相違といえる。

測量に関しては、ミャオ族の特定の支系(亜集団)だけではなく、出来る限り支系(亜集団)別に性別、年齢などほぼ等しい対象者を選び、客

観性に努めた。それ故、各支系（亜集団）の相違も判明したのである。このように、客観的な資料から結論を導き出すという、形質（自然）人類学的調査の原則を貫いている。そうであるからこそ、続く衣・食・住の土俗などの文化人類学的調査も、より説得力のある充実した内容となっている。

ミャオ族調査では、纏まって黥面蕃との比較をみられない。しかし、とくに旅行記の記載の中には、黥面蕃をはじめ、台湾の先住民族との比較が断片的ではあるが認められる。その一・二の事例を挙げると以下の如くとなる。

西南中国の中でもミャオ族が集中して分布・居住しているのは貴州省である。それ故、湖南省から入境すると、ミャオ族の姿が度々みられるようになる。貴州省東部の中心地鎮遠は湖南省から入境すると最初に出現する地方中心集落である。その鎮遠の先の草塘関付近（戸数4・50戸、海拔高度600メートル）でみかけた、水を汲んでいるミャオ族の女性を、「その風俗は頭上に置き、耳には耳環を嵌め、頭には銀環を掛け衣服は黒布で製し、腰まで垂れて居る。腰より以下は、台湾のツアリセン蕃の男子がやって居るような、膝の辺まで垂れる黒布の腰巻きを着けて居った」という記述からも判明するように、まるで黥面蕃と見紛うほどよく似ている。

さらに、その先の五里墩（戸数20戸、海拔高度900メートル）でみかけたミャオ族の女性の姿は、額の上に頭髪を丸く結び、これに木製の櫛をさしている。また耳には銀製の耳輪を嵌め、首には同様の首輪を掛けている。衣服は黒の木綿製であって長さは手の甲に達するほどの筒袖を着ている。衣服の裾は腰を被うぐらいで、襟は胸の左右で合っている。腰には股引のようなものを着用し、その長さは股に達するほどで、形は腰巻のように髪を取っている、と記している。このミャオ族の女性は、前述の女性の姿と類似しているが、頭髪

を丸く結んでいること、櫛をさしていること、股引のようなものを着用している点など、異なる点もある。このように差異は認められるのであるが、全体をみると上述の女性同様、黥面蕃の女性と類似している。なお、前述の女性共ども、黒ミャオ族である。また、この女性が頭髪を丸く結び髪に木櫛をさしている姿は、沖縄の女性に似ていると評し、日本民族との相違点などにも関心を寄せている。

以上論じたように、ミャオ族と黥面蕃とでは、女性の姿に代表されるように類似している。しかしながら、黥面蕃がミャオ族と同系統で関係を有するという、具体的な証拠の発見には到らなかった。むしろミャオ族は、南アジアの大陸部に分布・居住するインドシナ民族の系統に属すると考えられるという結論に達したのであった。

## 5. 結論——結びに代えて

鳥居龍藏は、国内調査以上に国外すなわち海外におけるフィールドサーヴェイに従事してきた。ミャオ族調査は、鳥居龍藏の初期における代表的なフィールドサーヴェイであるといえる。その理由としては、第1に、国内は勿論のこと海外における調査スタイルを決定づけた、フィールドサーヴェイであることが挙げられる。その初期の調査スタイルとは、対象調査民族に関して許す限りの書籍を読破することにより、文献上から正確な情報を入手するという、事前調査を重視したことである。さらに調査については、当時としては最新式の調査器具を駆使して科学的な検討・分析を加えた点である。第2としては、調査対象民族を自らの強い意志によって決定したことである。

以上の2点に要約できる調査スタイルは、直前に実施された台湾の先住民族すなわち少数民族についてのフィールドサーヴェイから学習したのであった。そこで本稿では、動機を含めて台湾調査の特徴をやや詳細に論じた。台湾の先住民族調査

は、初期における研究の代表的な人類学的なものであると共に、自らが生涯をかけて解明しようとした研究テーマの1つであった。それ故、西南中国のミャオ族調査は、鳥居龍藏の海外における調査・研究の基盤となったフィールドサーヴェイであり、規範とでも称するものであった。

西南中国のミャオ族に関する直接の動機は次のようであった。すなわち、直前の台湾調査は恩師坪井正五郎の依頼による、台湾における東京帝国大学理科大学の総合調査の分担としてであった。それ故、動機そのものは総合調査の一部であった。しかしながら、このような動機とは別に、個人的に強い興味・関心から生じた動機も存在した。それは、4次に亘る台湾調査の途中で実施した千島列島占守島調査から得られた、日本民族の形成つまり起源に関してであった。当時、鳥居龍藏の念頭にはなかったと推定されるが、日本民族の起源「固有日本人」説の考証である。かかる「固有日本人」説とは、シベリア、満州から朝鮮半島を経由して渡来した北方の集団が、日本民族を形成する主要な集団であるとの学説である。このような学説が提唱されることになったのは、西南中国のミャオ族調査からミャオ族は、日本民族を形成する主要な集団ではないという印象をもったことが大きく影響したと考えられる。そこで、フィールドサーヴェイの中心を、台湾や西南中国など南方に位置する民族集団ではなく、上述の北方に居住する民族集団へと力点がおおきく転換されることになったのである。この点に関しては、前稿(田畑2015:24)でも指摘したことがあった。本稿では、その経緯についてより詳細に論じた。

以上のように、西南中国のミャオ族調査には、特徴が認められる。その特徴に関して、繰り返し論じる余裕をもたない。しかし、調査の結果、ミャオ族は、次のような点で日本民族と相違していることが確認できた。すなわち、ミャオ族は、日

本民族と異なり、南方に分布・居住するインドシナ民族との類似点が著しい。この点は、入墨、首狩りなどがみられる黥面蕃などの台湾の先住民がインドネジアンに属する集団であるとの相違が存在する。このことは、頭髪などの特徴からも確認できた。

以上から、ミャオ族は自らが想定していたほど、台湾の先住民との類似点が少なく、共通点も多くみられないということが判明した。また、ミャオ族と同系統であると想定していた黥面蕃との間にも、同様の事実が分かった。しかしながら、この点に関しては、今後ミャオ族調査を実施する希望をもっていたことなどから、完全にミャオ族が日本民族と関連があるという点までは否定しなかった。

その後、照葉樹林文化論が抬頭したとき、その生態学的基盤である照葉樹林帯の核心部(東亜半月弧と称される地域)の主要民族がミャオ族であることが判明した。つまり、日本文化および日本文化の担い手(源流)としてのミャオ族が注目されることになった。そのような意味で、ミャオ族調査は先見性が認められるのである。

なお、本稿は鳥居龍藏のフィールドサーヴェイを中心に論を展開した。それ故、当時鳥居龍藏が使用していた用語の中で、現在では使用が禁止あるいは避けることが望まれるものも存在する。しかし、鳥居龍藏のフィールドサーヴェイの分析・検討なので、それらを指摘、訂正などせず、そのまま使用した。この点に関しては、現在の学問的水準からみれば、訂正しなければならない事実も存在するが、同様に指摘、訂正を控えた。

## 註

- \*1—周知のように、蝦夷島南部(道南地方)には松前藩が設置されていた。松前藩は、慶長5年(1600)にその前身である福山城を築き立藩し、徳川家康により所領安堵を得た。その後江戸幕

府は、文化4年(1807)に蝦夷全島を直轄した。しかし、その実態は、先住民族アイヌが居住していたため、完全にその支配下に置くことができなかった。江戸幕府が直接支配し、掌握したのは本州以南の地域であった。

\*2—拙攷(田畑1991)および拙著(田畑・金丸2017:6-9)などにおいて、度々論じたように、野外における実態調査はフィールドワーク(field work)と称されてきた。しかしながら、このような実態調査は、対象地域を広範囲に設定、すなわち広域的(extensive)に調査を行なうフィールドサーヴェイと、対象地域を特定の地域に限定して、集約的(intensive)に調査を実施する狭義のフィールドワークとに区別することが、かかる分野での先進国と目されるアメリカ合衆国などでは、むしろ常識化している。本文中にみられる、鳥居龍藏、近藤重藏、間宮林蔵、松浦武四郎などが採用した現地における実態調査は、上述の区分でいえば、フィールドサーヴェイに近い研究手法であるといえよう。それ故、本稿では、フィールドワークという用語を使用せず、フィールドサーヴェイという術語に統一した。

\*3—この点、つまり探検家としての側面に関して、鳥居龍藏同様、西南中国を詳細かつ精力的に実態調査を試みたDavis, H. R.との比較を行なったことがあるので参照されたい(田畑2014, 田畑・金丸2017:24-87所収)。なおデーヴィスは、イギリス人で、名門イートン校出身のイギリス陸軍歩兵少佐(薬師2006:297)であること以外、経歴などは不詳である。主著(Davis, H. R. 1909, 田畑・金丸編訳1989)の記述から、1894年から1900年にかけて合計4回西南中国の踏査旅行を挙行している。

\*4—さらに鳥居龍藏は、海外での実態調査と平行して、北は北海道千島列島から、南は沖縄県石垣島に到るまで、多数のフィールドサーヴェイを実施している。この点に関しては、拙著(田畑2007)を参照のこと。なお、鳥居龍藏は、西南中国以外、シベリア、満州、朝鮮半島、台湾(当時日本が領有)など日本列島周辺地域を中心に、海外でのフィールドサーヴェイに従事して

いる。これら海外でのフィールドサーヴェイについては拙著(田畑1997)に詳しい。

\*5—大林太良の主張する大転回点を要約すると、以下の3点となる。

① フィールドサーヴェイといえども、文献研究の重要性を認識したこと。

② 人類学研究は、人類が有する自然科学的要素の研究(形質あるいは自然人類学)も視野に入れる必要があるが、人文・社会科学の要素の研究(文化人類学)を主体に行なうべきであることに気付いたこと。

③ 日本民族起源論に関して、ミャオ族を筆頭に南方の民族集団も主要な構成要素の1つであることを確認したこと。

\*6—鳥居龍藏は、日本民族の起源つまり祖先は、自らが提唱する「固有日本人」と看做す「固有日本人」説を展開する。この「固有日本人」は、弥生時代頃に、シベリア、満州などから朝鮮半島を経由して、日本列島に渡来した民族集団を想定している。このように、鳥居龍藏は、日本民族のルーツをミャオ族などの少数民族が分布・居住する南方ではなく、北方から移動してきた民族集団が最有力であるとする。この「固有日本人」説は、幕末から明治・大正時代にかけて、Siebold, Fに代表される外国人も巻き込んだ、いわゆる日本民族祖先論争で闘わされたアイヌ=コロボ(ポ)ックル論争の過程で提唱された立場である。かかる学説を実証し、信憑性を高めるべく、シベリア、満州などの北方地方に関するフィールドサーヴェイを精力的に集中して実施したことも、北方地域を研究対象として重視する理由の1つと看做されよう。なお、鳥居龍藏の「固有日本人」説については、拙著(田畑2007:31-43)の中で論じているので、参照されたい。

\*7—このように、鳥居龍藏が中国の大陸部に居住する民族集団と、台湾に分布する民族集団の呼称法を明らかに識別するのは、以下のような理由からであると推察できる。すなわち、台湾の先住民族は、個々の民族名ではなく、日本領有時代(1895-1945年)などでは、台湾を高砂と別称することから高砂族という総称で呼ばれてい

た。現在でも、55を数える中国の非漢族の民族集団つまり少数民族の識別では、従来の呼称法を継承したものと推定されるが、同様に高山族と総称されている。鳥居龍藏は、これらの先住民族は、阿眉(美)(アミ)蕃、黥面(タイヤル)蕃など合計9つの民族集団に分かれることを確認した。この民族識別が台湾の先住民族の識別の規範となった。しかし、台湾という狭い限定された空間に互いに識別可能な9つの民族集団が居住しているが、各民族集団間では類似点も多く、かつ人口も多くないなどの理由から、一括して高山族という総称で呼ばれることになったと推定される。鳥居龍藏は、このような点を十分に考慮して、台湾の先住民族を「族」と称さないで、「蕃」と呼んだものと思われる。なお台湾では、現在でも、これらの民族集団を少数民族と呼ばないで、先住民族あるいは原住民族と称している。

- \*8—照葉樹林文化論においては、縄文時代の前期から中期(紀元前4000-3000年頃)を筆頭に、その後弥生時代初期(紀元前400年頃)にかけて、照葉樹林文化の主要な要素が数回にわたり、日本列島西南部(照葉樹林帯)に伝播したとされる(佐々木2007:177-181)。また、文化とりわけ物質文化(material culture)は、その担い手も同時に伴って伝来したと推定される。それ故、ユーラシア大陸東部の温帯南部において、帯状に分布する照葉樹林帯に居住する民族集団も、日本列島に渡来したものと考えられている。なお、照葉樹林文化論に関しては、拙著(田畑2007)も参照のこと。
- \*9—千島列島占守島は、現在ではロシア連邦領となっている。しかし、鳥居龍藏が調査した時代は、明治8年(1875)に榎本武揚が特使として調印した樺太・千島交換条約以後なので、日本領であった。同時に、明治28年(1895)に調印された日清講和条約(下関条約)後においては、台湾も日本領となった。それ故、占守島および台湾は、歴史的に厳密な意味では当時国外つまり海外ではなかった。
- \*10—台湾での調査を依頼されることになった理由に関しては、既論致の中で論じ、かつ検討したこ

とがある(田畑2015:12)。しかしながら、本文中でも指摘したように、ミャオ族調査は、自らの身分をも含めて台湾調査と大いに関連を有している。いわば、台湾調査は、連続した一連のフィールドサーヴェイのような性格をもつものと看做すことができる。それ故、この点についても手短かに補足しておきたい。

台湾調査は、本来であれば、東京帝国大学理科大学教授会の決議に基づき、他の3分野同様人類学の主任教授である坪井正五郎が台湾に出張し、学術的な調査に従事するはずであった。ところが、他の主任教授と異なり、坪井正五郎のみがとくに多忙などの事情から出張することが困難となった。そこで、やむなく、当時私的な立場で坪井正五郎研究室の標本整理掛りを担当していた、鳥居龍藏が代理として台湾に出張することになった。しかし、標本整理掛りという鳥居龍藏の身分では調査を充分に行なえない恐れが生じると判断した坪井正五郎は、明治31年(1898)の第3回調査の直前に、鳥居龍藏を東京帝国大学助手に推挙した。このことにより、それ以降鳥居龍藏は、東京帝国大学の正式の教職員の身分となったのである。つまり、台湾調査は、研究者としての鳥居龍藏の出発点となったといっても過言ではないのである。

- \*11—鳥居龍藏が自ら執筆した自叙伝には、de Lacouperieの著作を読んだのは台湾調査中であり、その著作とは“*The Languages of China before the Chinese*”と記されている(鳥居龍藏1953:177)。一方、西南中国における踏査旅行を纏めた、一般読者向けの紀行本では、台湾調査以前にde Lacouperieの著作を読破したとし、著作名も“*Formosa Note*”としている(鳥居1926:232)。この点に関しては、前著の自叙伝の記憶が誤っていると思われる。
- \*12—プロト・マレー(Proto-Malay)と呼ばれることが多い、古いタイプのマレー人種(種族)の形態を残しているインドネジアン同様、「固有日本人」と混血し、現在の日本民族を形成する民族集団の1つ。インドシナ民族が日本民族を形成した理由としては、西日本各地から出土する銅鐸をこの民族集団が残したからであるとする。



また、この民族集団は、ビルマ（ミャンマー）族、タイ族、ミャオ族をはじめとする南中国に分布する漢族以外の少数民族の3民族集団から構成されるという（鳥居 1925, 鳥居 1975 : 380-390）。なお、インドネジアンおよびインドシナ民族に関しては、拙著の中で論じたことがあるので、詳細は参照のこと（田畑 2007 : 80-83）。

\*13—鳥居龍藏は、台湾に居住する少数民族について、とにかく議論があると断じつつ、「フィリピンであるとか、ジャワ、スマトラ辺に居ります人間と同じ者、すなわち北マレー種族であると見て間違いない」（鳥居 1936, 鳥居 1976c : 563）と指摘する。それ故、フィリピンやジャワ、スマトラ両島などに居住するインドシナ民族が直接関連がある、と看做したのであった。

\*14—鳥居龍藏は、既に指摘したように、本省人などから先住民族あるいは原住民族と看做されている民族集団を蕃と称した。蕃には生蕃と熟蕃の明確な区別が存在した。前者の生蕃とは、本来教化に従わない異民族を指した。台湾の場合、漢族（本省人）に同化しなかった民族集団のことをいう。後者の熟蕃は、少数民族の中でも主として平地に居住する平埔蕃など、漢族に同化した民族集団を示す。生蕃および熟蕃の用語は、主として清朝時代（1616-1912年）に使用され、その後の日本領有時代においても使われていた。現在では、蕃同様、これらの用語は慎むべきものとされている。

\*15—台湾の少数民族について、外国人研究者などの先行業績がみられるが、鳥居龍藏独自の視点から9つに分類している。その理由としては、「しかし、今、列記した碩学たちからは学びうるものがあるとはいえ、ここではなにもとり入れないつもりである。そして現在のところ、私の新たな分類がはるかに論理的で合理的であり、かつ正しいと信じているので」（鳥居 1910, 鳥居 1976a : 9）と述べている。その9分類とは以下の通りである。

- I 黥面（タイヤル）蕃、あるいは有黥面蕃
- II ブヌン蕃
- III 新高蕃
- IV サウ蕃

V ツアリセン蕃

VI パイワン蕃

VII ピウマ蕃

VIII 阿眉蕃

IX ヤミ蕃

なお、上記の9分類は、鳥居龍藏がフランス語で発表した論攷にみられる。この発表論攷は、「鳥居龍藏全集 第5巻」に日本語に翻訳されている。しかし、鳥居龍藏が論攷あるいは著作において使用している用語とは異なって訳されているものが存在する。鳥居龍藏は、既に指摘したように、「蕃」と「族」とを明確に区分して使用している。例えば、翻訳ではタイヤル族の如く、フランス語の'tribu'を通常訳するように「族」としているが、鳥居龍藏は、台湾の少数民族に関してはタイヤル蕃と記している。また同様に、有黥面蕃をその意味、すなわち入れ墨（文身）を取って文身蕃と訳されている。本稿では、かかる翻訳された名称を取らず、論攷などで使用されている名称通りとした。また新高蕃は、鳥居龍藏が命名した名称で、一般にはツオー蕃と呼ばれている。

\*16—新高蕃すなわちツオー蕃は、新高山を取り巻く山中に分布・居住しているが、地域的には大きく3つの支系（亜集団）に分けられる。第1は、スンガウ集団と呼ばれ、新高山の東部下淡水の上流濃渓流域に分布している。第2は、カナップ集団と称され、スンガウ集団の西側一帯に位置する阿里山の山中に分布している。この集団は、新高山の山中から移動してきたといわれている（鳥居龍藏 1910, 鳥居 1976d : 11）。

\*17—鳥居龍藏が台湾調査において新たに命名した名称。理由は、「彼等の其の面部に黥<sup>いれずみ</sup> Pataschをなせる点、他の蕃族と著しく異なるを以て」（鳥居 1897c, 鳥居 1976d : 492）であるという。

\*18—ただし、台湾東南に位置する卑南平原に分布・居住する先住民族である卑南蕃（ピウマ蕃とも称される）およびその近隣に住む知本蕃にも、女性は手の甲に、男性は腕に花鳥や人物などを模した非常に素朴な入墨を施している（鳥居 1897c, 鳥居 1976d : 483）。しかし、両民族集団は、男女とも顔面に入墨を行なわない。このよ

うに、入墨は黥面蕃以外にも確認できるが、卑南蕃および知本蕃とも人口が少ない。また上述のように、とくに目立つ入墨を顔面に施さない。それ故、鳥居龍藏は、顔面に入墨をする習俗を有する民族集団をその代表と看做し、黥面蕃あるいは有黥面蕃と称したのである、と推察される。

なお、知本蕃に関しては、集落(社)が1集落しかみられないことなどから、台湾の少数民族を構成する9つの集団の中に入れられていない。

\*19—首狩りは黥面蕃だけではなく、山岳地帯に分布・居住するブヌン蕃のセブクブン支系(亜集団)やツアリセン蕃などにも確認できる。これらの民族集団では、狩り取った首を保存するが、その方法が多少異なっていた。しかし、棚などを設置してその上に並べるという形式は共通していた。

\*20—首狩りに関しては、人を殺した頭の数に応じて顔に入墨を施したとする説が存在する。しかし、鳥居龍藏が台東の有黥面蕃を直接調査したところ、7・8歳の小児の顔面に入墨がある事例や、40~50人の首を狩り取ったにもかかわらず、顔面には1つしか入墨がない男性もみられた。そこで、鳥居龍藏は、狩り取られた首の数と入墨の数はまったく関係がないと断じている(鳥居 1897c, 鳥居 1976d : 492)。

\*21—なお、鳥居龍藏によれば、首狩りには異なる2種類の方法が存在するという。第1は、ボルネオの先住民族にみられるもので、祖先の霊に供えたり、家の装飾、あるいは根付けなどに用いられる。第2は、フィリピンにみられるもので、結婚に際しての必需品、つまり花婿が花嫁に送る結納品とするために必要とされる。黥面蕃の首狩りは、前者のボルネオ的なものに近いという。また、かかる首狩りは、最初にマレイ(一)半島から渡来した時代からの風習で、その後シナ人との接触の結果ではないとする。つまり、黥面蕃に代表される台湾の少数民族は、その祖先が南方から北上して台湾に到達したと指摘する(鳥居 1897c, 鳥居 1976d : 493)。このことが、台湾の先住民族すなわち少数民族が南方

より北上して渡来したという、先住民族南方起源説の証拠の1つと看做されるのである。

\*22—鳥居龍藏が台湾の中でも東部に強い関心を有したのは、以下のような理由からであったと推察される。台湾の中でも、東部および隣接する南部は、漢族が進出していない地域、つまり当時の管轄外に置かれていた。かように、漢族から等閑視され続けてきたのは、第1に、山岳地帯が多く、交通の便が非常に不便なこと、第2に、良港に恵まれないこと、第3に、生蕃の性格が猛悪なこと、の3点であった。それ故、かかる地域は、いわば Terra Incognita (未知の土地) という状況なので、とくに調査を実施する必要を感じたのであった(鳥居 1897c, 鳥居 1976d : 486)。なお、中国政府(清朝)がこの地域に進出させたのは、明治7年(1874)、日本人がパイワン蕃の集落である牡丹社を攻撃した事件の翌年の明治8年以降であった。

\*23—以下の黥面蕃の特徴に関しては、鳥居龍藏の2編の論攷(鳥居 1897b, 鳥居 1976d : 464-485, 鳥居 1897c, 鳥居 1976d : 485-505)に記載されている。それ故、記載内容について、引用あるいは参照した箇所のページ数など出所を正確に示すということが原則であるといえる。しかしながら、引用あるいは参照が非常に多いのですべての箇所を正確に明示すると、文章が読みずらくなり、文意を把握しずらくなることが十分に予想される。そこで、以下黥面蕃の具体的な記載内容に関しては、引用箇所を明示して割愛することにした。しかし、直接に引用した文章については、とくに重要、かつ正確性が要求されると看做されるので、鉤括弧を付けた。

\*24—なお、鳥居龍藏は自らのフィールドサーヴェイの成果などから、台湾東部に分布・居住する蕃族と称されている先住民族つまり少数民族を大きく2区分した。山中に棲息する山蕃と、平地に居住する平地蕃である。前者の山蕃には、黥面蕃、高山蕃の2集団、後者の平地蕃には、阿眉蕃、知本蕃、卑南蕃、平埔蕃、加礼宛蕃の5集団がそれぞれ属している。これら合計7集団の内、上述した鳥居龍藏による台湾の少数民族9分類の中に入っていないのは、上述した知本蕃

の他、高山蕃、加礼宛蕃の2集団である。

- \*25—卑南（台東）平原に居住する民族集団。高山蕃とは漢族によって命名された他称である。自らはIwatanと名乗っている。元来は台湾中央に鎮座する新高山（玉山、3950メートル）山中周辺に分布していた。現在では東部に移動し、近接して居住する黠面蕃より海拔高度の高い山岳地帯に住んでいる（鳥居1897b, 鳥居1976d: 471）。
- \*26—脚半の穿き方は、脚の後ろに脚半の中央を当て、前で両端を合わす。脚半には結ぶ紐が付いておらず、4尺（約1.2メートル）ほどの細長い小切れ（Hawack）で前に結び、その結びの余分を下に垂らしている。
- \*27—黠面蕃同様、両耳に穴をあけ竹管を通してするのは、台湾東部では阿眉蕃が目立つ。その中でも、とくに台東の秀姑巒溪付近に居住する阿眉蕃（北部阿眉蕃に分類される）は、耳朵の穴に鉛製の大きな耳輪を付けている。なお、知本蕃および卑南蕃の中には穴だけあけているのが見受けられるが、中年以上に限定される。
- \*28—首飾りに関して、古代の日本人も同様に動物の牙とか曲玉を首に巻いて飾るという習慣があった。それ故、鳥居龍藏は、このような首飾りのルーツは、台湾に求めることができると推定している。
- \*29—阿里山蕃も黠面蕃同様、山中を生活の拠点としている。しかし、食料の獲得には黠面蕃と多少異なる側面がある。すなわち、阿里山蕃は鳥居龍藏の調査時点なのであるが、猪、鹿などの動物、雉をはじめとする鳥類を主要な捕獲対象とした狩猟の比率が高く、自らも狩猟民であるという意識を有していた。そのため、帽子、脚絆など身体を保護する必需品は、鹿など捕獲した動物の皮でつくったものを用いることが多かった。一方、黠面蕃も同様に狩猟を好むが、食料獲得からいえば、狩猟による依存度はそれほど多くなかった。
- \*30—ただし、隣接する高山蕃などは、漢族と接触・交流する以前から、捕獲した鹿の角を、木棒の先端に切れ目を入れ差し込み、鍬のようなものを作製している。この鍬状のものは、土地を耕

すときに使用される。

- \*31—小刀は、山蕃と称されることの多い山岳地帯を中心に分布・居住している民族集団も同様のものを携帯している。この小刀の特徴は、刀を収納する鞘にある。鞘の一方（外側）は木を用い、他方（内側）は針金（真鍮線）を格子状に張ってあるだけである。そのため、内側からは刀身が露出することになる。なお、黠面蕃は首狩りを行なうので、小刀の鞘に狩り取った頭髪の一部を掛けるという習慣がみられる。なお、黠面蕃など台湾の先住民族は製鉄の技術をもたないので、小刀の刃は漢族から入手したものであろう。
- \*32—台湾に居住する先住民族の中にも、土器製作の技術を有する若干の集団が存在する。阿里山蕃も土器製作を実施している。阿里山蕃の土器製作に関しては、後で検討する。
- \*33—これに対して高山蕃では、住居と穀物倉とが分離しておらず、住居の一部に粟、米などの穀物やマメ類などを貯蔵している。
- \*34—台湾の先住民族の武器として鉄砲が挙げられる。鉄砲は近年流入したものである。それ故、伝統的な武器としては刀、鎗、弓矢の3種類となる。これらの武器はすべて先住民族が所有していた。
- \*35—高山蕃の他社では、壁はスレート状の石を積み重ねてつくり、屋根も雲母岩のスレートを載せ、その上をカヤで葺いている。
- \*36—土器に関しては鳥居龍藏の2編の論攷（鳥居1897a, 鳥居1901）を参考にした。なお、内容については身体的特徴、身体装飾などと同様に、引用した箇所のパージ数などの明示を省略した。
- \*37—阿眉蕃の北部集団が製作している土器の種類として以下のものを挙げている。
  1. 神および死者に供するための酒を盛る高杯。
  2. 食塩、野菜などを入れる皿。
  3. 水などを入れる碗。
  4. Vokao と称される口の狭い土器。両側に耳が付いている。
  5. Turaranan と呼ぶ蒸し器。ヒョウタン状で中央が括れた器。下部に水を入れ、上部の底に木

の葉を敷いて孔を防ぎ、上部に粟や米、イモ類などを入れて蒸す。上部と下部を別々に製作し合わせている。

6. Atomoと名付けられたもので、水を運搬する手桶に類似した器。両側に耳が付いたものもある。

\*38—土器は高さ6寸（約18センチメートル）、胴部は2尺4寸（約7センチメートル）、口径は5寸（約15センチメートル）、厚さ3分（約1センチメートル）で、赤褐色をしている。外形は胴部が張っており、上に従って狭くなっている、やや小型の壺である。

\*39—ミャオ族調査に関しては、台湾調査と異なり、詳細な学術報告書（鳥居1907）および旅行記（鳥居1926）を発行・出版している。それ故、ミャオ族の特徴に関してはこれらの著作を参考にした。しかし、参考および引用した箇所が多く、その箇所ごとにページ数などの根拠を明示すると、文意の把握が困難になるなどの恐れが十分に考えられる。そこで、台湾の少数民族の記載同様、引用した箇所などの明示をすべて省略した。

\*40—鳥居龍藏のミャオ族を含む西南中国調査の行程や調査記録に関しては、旅行記に詳しい。なお、この点については拙著（田畑1977：57-109、田畑2015）においても論じたことがあるので、参照されたい。

\*41—女性に関しても、花ミャオ族の女性の身長測定を実施した。しかし対象者が非常に少ないことなどから、その測定から得られた数値は、ミャオ族の身長に関するデータからなる表には反映されなかった。

\*42—「皮膚色表号」は、Broca, P. “*Instructions générales pour les recherches anthropologiques*” (1879)の付録にあるCouleurs de la peau et du Système pileuxによった。

\*43—周知のように、鳥居龍藏は、ミャオ族を女性が常用しているブリーツスカートの色より5つの支系（亜集団）に区分した。花、青、白、黒、紅の各ミャオ族がこれに該当する。打鉄ミャオ族は、これらの5区分の支系（亜集団）には所属していない。打鉄という名称は漢族が名付け

た他称であり、貴州省中央部の恵水および青岩付近など限られた狭い範囲のみに分布する。その名称から、鎌などの農具を製作する鍛冶を行なう技術を有していた集団ではないか、と看做されている。狛家ミャオ族は狛ミャオ族とも呼ばれ、同様に鳥居龍藏の区分では所属しない民族集団である。現在では、貴州省に広く分布するプイ（布依）族と呼ばれている民族集団である。なお、プイ族は中国に居住する少数民族の1集団である。

\*44—身長の高短、すなわち長身、短身の区分は、Topianard, P. “*Eléments d’Anthropologie générale*” (1885) 462ページで紹介されているものを使用した。同書では、男性の場合長身は1.7メートル以上、平均以上の身長は1.65-1.69メートル、平均以下の身長は1.60-1.65メートル、短身は1.60メートル以下の4区分である。

\*45—装飾品がその家庭の財産となっている典型的な事例は、貴州省東南部を中心に分布する黒ミャオ族の場合である。黒ミャオ族の若い女性は、「ハレ」の日などでは正装するが、その頭上に銀製の、漁具の箆のように先端が3つに分かれた山型をした冠を被る。この冠の形は各家で異なっているが、それぞれの家でもっとも貴重な財産であるという。

\*46—アメリカ大陸起源のトウモロコシがミャオ族居住地区に導入されたのは、16世紀初頭のこととされている。また、中国へはスンドからチベット経由で中国に伝播したと考えられている（星川1978：37）。しかし、ミャオ族居住地区は、珠江支流西江上流に位置しているため、南シナ海に面している広西方面から導入されたことも考えられる。塩（海塩）の流通ルートがこのコースだからである。

\*47—ミャオ族は、集団独自の文化を堅持するため、歴代王朝に対して絶えず反抗を続けてきた。明王朝（1368-1644年）は、このようなミャオ族の反抗を制圧すべく、徹底した弾圧を実行した。続く清王朝（1616-1912年）は、その一環として漢族の屯田兵を多数ミャオ族居住地区に送り込んだ。屯田兵は、ミャオ族が所有していた良田を取り上げ、そこに住みはじめた。このように

して、ミャオ族居住地区である貴州省に漢族が定着したのである（田畑ほか2001：165）。

- \*48—一般には、鳥居龍藏のライフワークは、契丹、すなわち遼の文化であると看做されている。理由としては、残念ながら未完に終わった大作「考古学上より見た契丹の文化」を執筆していたことから伺い知られる。遼の文化は、考古学的な発掘調査などから、朝鮮半島経由で日本列島に伝播し、日本文化にも影響を与えた、と推定しているようである。この点に関しては、筆者も大変関心を有している。今後の研究課題としたい。
- \*49—とはいうものの、インテンシィヴな調査も実施している。台湾本島の南東海上に浮かぶ蘭嶼島（紅頭嶼）に居住するヤミ蕃（現在ではタオ族と称されることが多い）である。ヤミ蕃については、調査報告書（鳥居1902）を筆頭に多数の論攷（鳥居1898など）や写真集（鳥居1899）を刊行発表している。
- \*49—鳥居龍藏は、後に日本民族と称される集団は、アイヌを除くと、次の異なる3系統の集団が混血して形成されたと推定した。その3系統とは、自らが提唱する「固有日本人」を中核とし、南方から渡来したインドネジアン（マレー人種）およびインドシナ民族である（鳥居1916, 鳥居1975b：505）。なお、インドネジアンは台湾を経由して日本列島に渡来してきたとしている。
- \*50—中国の場合、とくに大陸部においてであるが、学問的な状況は他の国や地域とは異なる。つまり、中国は「文献の国」と称されるほど、多くの書物が出版されている。その中には、ミャオ族をはじめ多くの少数民族に関する記載がみられる。しかしながら、ほとんどといってよいぐらい、これらの書物の著者あるいは編者は、少数民族居住地区に出かけ、フィールドサーヴェイとまでいかなくとも、観察すらしていないのである。それ故、主として伝聞などによって収集した資料を中心に記載されているものが多かった。したがって、これらの書物には信憑性について問題があるものも存在する。正確な土地勘がないためである。

- \*51—西南中国では、ミャオ族以外にも四川省を中心に分布している猓族も調査の対象であった。しかしながら、猓族については、当初主要な調査対象ではなかった。それ故、事前での書籍を中心とする文献研究にも、ミャオ族ほど徹底したものでなかった。このような理由などから、猓族に関しては、旅行記の後半には登場するが、正式の調査報告書は作成されなかった。

#### 引用文献

- 大林太良（1975）「〔人と学問〕鳥居龍藏の日本民族形成論」、『社会人類学年報“創刊号”』121-131.
- 大林太良（1980）「解説」, 鳥居龍藏（1980）『中国の少数民族地帯をゆく』, 朝日新聞社.
- 佐々木高明（2007）『照葉樹林文化とは何か——東アジアの森が生み出した文明』, 中央公論新社（中公新書）.
- 田畑久夫（1991）「鳥居龍藏のフィールドサーヴェイ——西南中国調査を事例として——」, 『岐阜地理』43（伊藤安男会長古稀記念論文集）, 162-165.
- 田畑久夫（1977）『民族学者 鳥居龍藏 アジア調査の軌跡』, 古今書院.
- 田畑久夫（2003）『照葉樹林文化の成立と現在』, 古今書院.
- 田畑久夫（2007）『鳥居龍藏のみた日本 日本民族・文化の源流を求めて』, 古今書院.
- 田畑久夫（2015）「鳥居龍藏の少数民族調査に関する研究手法——ミャオ族調査を事例として——」, 『昭和女子大学大学院生活機構研究紀要』24, 11-31.
- 田畑久夫・金丸良子・新免康・松岡正子・索文清・C, ダニエルス（2001）『中国少数民族事典』, 東京堂出版.
- Davis, H. R. Major（1909）“Yün-Nan: The Link between India and Yangtze”, Cambridge Univ. Press, England. 田畑久夫・金丸良子編（1989）『雲南——インドと揚子江流域の環』, 古今書院.
- 寺田和夫（1981）『日本の人類学』, 角川書店（角川文庫）. 親本は2001年思泉社から出版された.
- 鳥居龍藏（1897a）「東部台湾, 阿眉蕃族の土器製作に就て」, 『東京人類学雑誌』135, 鳥居龍藏（1976d）『鳥居龍藏全集 第11巻』, 朝日新聞社, 501-579.
- 鳥居龍藏（1897b）「東部台湾に於ける各蕃族及び其分

- 布], 『東京人類学会誌』, 136, 鳥居龍藏 (1976d) 『鳥居龍藏全集 第11巻』, 朝日新聞社, 464-485.
- 鳥居龍藏 (1897c) 「東部台湾諸蕃族に就て」『地学雑誌』 9-104, 105, 鳥居龍藏 (1976d) 『鳥居龍藏全集 第11巻』, 朝日新聞社, 485-505.
- 鳥居龍藏 (1897d) 「有黥蕃の測定」『地学雑誌』 9-107, 鳥居龍藏 (1976d) 『鳥居龍藏全集 第11巻』, 朝日新聞社, 553-554.
- 鳥居龍藏 (1898) 「紅頭嶼の土人は如何なる種族より成る乎」, 『地学雑誌』 10-116, 鳥居龍藏 (1976d) 『鳥居龍藏全集 第11巻』, 579-584.
- 鳥居龍藏 (1899) 『人類学写真集台湾紅頭嶼之部』, 東京帝国大学理科大学刊, 鳥居龍藏 (1976d) 『鳥居龍藏全集 第11巻』, 朝日新聞社, 281-326.
- 鳥居龍藏 (1901) 「台湾阿里山蕃の土器作り」, 『東京人類学雑誌』 187, 鳥居龍藏 (1976d) 『鳥居龍藏全集 第11巻』, 朝日新聞社, 558-560.
- 鳥居龍藏 (1902) 『紅頭嶼土俗調査報告』, 東京帝国大学刊, 鳥居龍藏 (1976d) 『鳥居龍藏全集 第11巻』, 朝日新聞社, 281-328.
- 鳥居龍藏 (1903) 「支那に於ける苗族の地理的分布並に其の現状」, 『地学雑誌』 15-173, 174, 鳥居龍藏 (1976d) 『鳥居龍藏全集 第11巻』, 朝日新聞社, 368-383.
- 鳥居龍藏 (1905) 「苗族は現今如何なる状態にて存在する乎」, 『史学雑誌』 16 編 3, 4, 5, 鳥居龍藏 (1976d) 『鳥居龍藏全集 第11巻』, 朝日新聞社, 383-396.
- 鳥居龍藏 (1907) 『苗族調査報告』, 東京帝国大学理科大学人類学教室, 鳥居龍藏 (1976d) 『鳥居龍藏全集 第11巻』, 朝日新聞社, 1-280.
- 鳥居龍藏 (1910) “Etudes Anthropologiques. Les Ahorigènes de Formose. (I<sup>e</sup> Foscicule.) Introduction.”, 『東京帝国大学理科大学紀要』 28-6, 同翻が鳥居龍藏 (1976b) 『鳥居龍藏全集 第5巻』, 朝日新聞社, 1-74.
- 鳥居龍藏 (1911) 「遼の上京と其遺品」, 『国華』 21-248, 253, 鳥居龍藏 (1976e) 『鳥居龍藏全集 第6巻』, 朝日新聞社, 576-587.
- 鳥居龍藏 (1915) “Etudes Archéologiques et Ethnologiques Populations Préhistoriques de la Mandé-nourie Méridionale”, 『東京帝国大学理科大学紀要』 36-8, 同翻訳が鳥居龍藏 (1976e) 『鳥居龍藏全集 第6巻』, 朝日新聞社, 231-310.
- 鳥居龍藏 (1916) 「古代の日本民族移住発展の経路」, 『歴史地理』 28-5, 鳥居龍藏 (1975a) 『鳥居龍藏全集 第1巻』, 朝日新聞社, 504-506.
- 鳥居龍藏 (1922) 『北満州及び東部西伯利亚調査報告』, 『朝鮮総督府古蹟調査特別報告第二冊』, 鳥居龍藏 (1976a) 『鳥居龍藏全集 第8巻』, 朝日新聞社, 259-280.
- 鳥居龍藏 (1924) 『人類学及び人種学上より見たる北東亜細亜』, 岡書院, 鳥居龍藏 (1976a) 『鳥居龍藏全集 第8巻』, 朝日新聞社, 1-258.
- 鳥居龍藏 (1925) 『有史以前の日本 改訂版』, 磯部甲陽堂, 鳥居龍藏 (1975a) 『鳥居龍藏全集 第1巻』, 朝日新聞社, 167-454.
- 鳥居龍藏 (1926) 『人類学上より見たる西南支那』, 富山房, 鳥居龍藏 (1976c) 『鳥居龍藏全集 第10巻』, 朝日新聞社, 219-521. なお同書は, 前半部などの一部を省略して, 鳥居龍藏 (1980) 『中国の少数民族地帯をゆく』, 朝日新聞社 (朝日選書) として復刊.
- 鳥居龍藏 (1928) 『満蒙の探查』, 萬里閣書房, 鳥居龍藏 (1975b) 『鳥居龍藏全集 第9巻』, 朝日新聞社, 285-393.
- 鳥居龍藏 (2013) 『ある老学徒の手記』, 岩波書店 (岩波文庫), 親本は鳥居龍藏 (1953) 『ある老学徒の手記——考古学とともに六十年』, 朝日新聞社, 鳥居龍藏 (1976f) 『鳥居龍藏全集 第12巻』, 朝日新聞社, 137-348.
- 星川清親 (1978) 『栽培植物の起源と伝播』, 二宮書店.
- 薬師義美 (2006) 『大ヒマラヤ探検史——インド測量局とその密偵たち——』, 白水社.

(たばた ひさお 生活機構学専攻 教授)

受理年月日 平成 29 年 10 月 2 日

審査終了日 平成 29 年 12 月 12 日